

ネオポルターレ思想の時代

－語らない身体からの訣別－

－The Neoportare-Thought Age : Awakening from the Silent Body－

伴 義孝
Yoshitaka Ban

キーワード：ポルターレ・身体運動・生き方の問題

portare・human movement・problems on the way of life

Abstract

The purpose of this paper is to study on the relation between “human movement” and “problems on the way of life”. The present writer has dialogued with students, through the lecture for a quarter of a century at Kansai University, on the meaning of human movement as human ontology from the standpoint of “Theory of the Human Movement” which is neither “Theories of the Body” nor “Theories of the Mind” as existent theory. The effect of this dialogue has inspected the serious problems on human alienation which should not be neglected. Among these, four specific appearances in today's Japanese society have been pointed out, namely “Materializing of the Body”, “Takeoff of the Mind”, “Blockage of the Sensibility” and “Burying of the Expression” as living phenomenon. In this paper, in order to overcome present problems, our reflections are discussed afresh ascending to the primary matter on “Bipedal Locomotion” as the basis of human movement. Furthermore, the discussion casts our reflections on the problems concerned between human and living world, namely “problems on the way of life”, caused by today's living aspect of over-dependence upon machine civilization. The awareness through these reflections raise new problems which should be realized as the matter how to accept the situation in progress of separation on “Body” and “Mind” that is to say “Practice” and “Theory”, in shortly summarized, as the matter of “Problems on the Way of Life”. In this paper, through dialogue with students, it is expected that a framework of the “Neoportare-Thought” as new living thought will be designed in order to make “Practice” and “Theory” unify into working together.

要 旨

本稿は「身体運動」と「生き方の問題」との関係についての検討を目的とするものである。論者は、関西大学における四半世紀にわたる講義において、既存の精神論や身体論からではなく、身体運動論の立場から、人間存在論としての身体運動の意味について学生とともに対話してきた。

その結果、今日の日本社会における「モノ化する身体」「離陸する精神」「閉塞する感性」「埋没する表現」という生活現象の顕現を指摘しえて、深刻な人間疎外問題の猶予ならぬ状況を検証することとなった。本稿では、この猶予ならぬ状況を克服するために、身体運動の根源的な二足ロコモーション問題にまで遡ってあらためて反省してみる。そのうえで、人間と生活世界との「かわり」の在り方問題について、すなわち、「生き方の問題」について、今日における機械文明過剰依存生活状況の側面から反省してみる。こうした反省からの学びは、一言に要約するならば、「身体」と「精神」の乖離状況の進行を、換言するならば「実践」と「理論」の乖離状況の進行を、生き方の問題としてどのように受けとめるべきなのかという新たな問題提起となっている。本稿では、実践と理論との融合を企図するために、学生たちとの対話をとおして、新しい生活思想としての「ネオポルターレ思想」の構想実現を期待するものである。

1. はじめに

本稿は講義録の抄出である。さて、「ネオポルターレ」とはボク（本稿では本表記を敢えて活用）の造語である。横文字で書けば「neo=ネオ」と「portare=ポルターレ」との複合語「neoportare」となる。ところで、ボクのこの造語の企図は、「スポーツ」の語源である中世ラテン語「デポルターレ=deportare」もしくは「ディスポルターレ=disportare」思想への、または19世紀末頃より特に顕著になった近代的「sport」思想への対抗文化として、21世紀社会に相応する日常的な新しい生活思想「ネオポルターレ思想」の構築を期待してのことである。

つまり「ポルターレ=portare」とは、「生活物資を運ぶ」ことに由来する肉体労働のことであって、昔日の生きていくためのこの生業（なりわい）では、洋の東西を問わず、万人が自らの重労働を基盤にしてきた。そして人心は、艱難しなければならないその状況「辛・苦・労」から離脱したいという自由願望を嵩じさせて、いつしか「快・楽・遊」を求めだしたのであった。すなわち「ディスポルターレ=disportare」の「dis」とは、その「自由願望」を手に入れるために、艱難に拘束される肉体労働からの離脱行為を意味している。

願望が働くのであれば、生活に密着する「言葉」は「思想」を形成する。さらに思想

は生活風土に馴染みながら伝播し変容する。そこで、ラテン語「ディスポルターレ」の意味する「重労働からの離脱・自由願望」という生活思想が、さまざまな変容を経由しながら同じヨーロッパ語族の中世英語に伝播して「ディスポルト=disport」として定着した。やがて「ディ=di」のみが抜け落ちて新しい用語「スポーツ=sport」として16世紀のイギリスで使われだすことになったのである。そしてスポーツは、19世紀ともなると、世界的に生活文化として伝播することになる。だがしかし、語義は、風土と生活状況に照らしてそのときどきの時代精神（願望）とともに変遷してきたのであった。（伴・1994）

日本では、輸入文化である「スポーツ」の語義を「狩猟」とか、「スポーツマン」を「獵人」とか解した時代もある。明治の末期のことだった。多くの文学青年の読んだツルゲネフの小説『A Sportsman's Sketches』が『獵人日記』と定訳されていたことに拠る（木村・1978）。さしあたり源泉のヨーロッパにおいても、もちろん、意味は変遷してきている。ボクは、「スポーツ」もまた、語源からして、身体運動（human movement=註：本稿での英語表記）の存在様式を表現する「からだ言葉」であると考えている。そして留意しておくべきことは、からだ言葉の意味内容こそはおしなべて時代の生活思想とともに変遷することである。現代英和辞典を読み

ばすぐに判る。

スポーツ・運動競技・競技会・運動会。
娯楽・楽しみ・気晴らし。（古語としての）たわむれ・からかい・あざけり・冗談。（定冠詞をつければ）もてあそばれるもの・物笑いの種。遊び人。（生物学用語として）突然変異・変種。

というようにさまざまな意味がある。手元の『ジーニアス英和辞典』から引いてみた。辞書は用語の頻度順に書かれている。いうまでもなく羅列の最初が現代用語である。しかし辞書であるかには古語や派生語の意味も紹介される。その変容過程にこそ時代とともに思想化する「からだ言葉」の本義が読み取れるのだが、現代では、死語になりつつあるものも多い。そこで本稿では、「自己を語る身体表現」としての「からだ言葉の思想」の問題に視点を合せてみて、「ポルターレ」の根源的な本義についてあらためて考えてみたい。

ともあれ、語源「ディスポルターレ」も中世英語「ディスポルト」も16世紀英語「スポーツ」も、単なる知識（定義）として、現代用語「スポーツ」と混同して鵜呑みにしてはならないのである。スポーツの形容詞は「sporting」であるのだが、その用法において知ったかぶりをすれば、大変なことになりかねない。早い話が、「sporting girl」と言ってしまうと、アメリカでは、現代用語としても「売春婦」を意味することになるのだから。

そんなわけで、本稿では、多くの人びとが固定的な知識過剰依存症候群に侵されている日本の現代社会にあって、からだ言葉としての「ポルターレ＝働く」の本質を問い直してみようと考えている。そのうえで、ボクは、和製造語「ネオポルターレ」の思想を明らかにして、「身体論」や「運動論」ならぬ「身体運動論」の立場から、本稿が指弾することになる現代社会の緊急課題「語らない身体からの訣別」の問題に迫ってみたい。

ところで、型破りなことは承知のうえで、

本稿を読んでもくれる方々に提案がある。本文中にはボクの構想するパフォーマンスと構図絵を文章化してある実景描写がたびたび登場することになる。ボクの願いは、「パフォーマンス」と「構図絵」とおぼしき行間にさしかかったならば、読者自身が、そのくだりを単に読み流すだけでなく、その都度「からだ」で、即興的に演じてみたり描いてみたりしてみてほしいことにある。そのように同調していただけるならば、ボクの筆力を補ってくれて、本稿の問う「ネオポルターレ」思想のいかほどかが直截に伝わるのではないかと期待している。なにせ、からだ言葉は、生きる風土において展開されてきた「ポルターレ」を基盤とするさまざまな生活に根づいたものであって、その真意こそは、絵に描いた餅を開陳しても伝わるものでないのである。

2. 二足ロコモーション生活者

ボクは、教室などでの初対面の青少年に、二足直立姿勢は何をするために在るものなのかと、必ず発問することになっている。まず、みな、怪訝な顔をする。

「……歩くため？ 両手を使うため？」

「……」

などとすべてが「頭」を過剰にひねりだす。間違いではない。しかし、いずれも、本質を衝いていない。この姿勢こそは、実に人間をして、哺乳類のなかでその体重比において一番の力持ちに育てあげてくれた根本なのである。しかも二足歩行と直結して先鋭な「重量物長距離運搬能力」を練成してくれた。原因は、重量物を支えるためには縦に長い直立姿勢が適しているという力学に拠る。さらに卓越した「生産管理能力」と「安全管理能力」とを育成してくれた。原因は、相対的に高い位置にある「両眼」が、その遠望能力と遠近識別能力とを相乗させて、獲物や外敵を逸早く見つけるのに有利に働いたことに拠る。

2-1 「生きる力」の本質

人類の始祖は二足ロコモーション生活者 (bipedal locomotion existence) へと400万年前に転身した。本稿ではこの通説を採る。ボクの身体運動論の立場からすれば、問題のすべては、この「400万年間」をかけて培ってきた三つの基本的生存戦略「重量物長距離運搬能力・生産管理能力・安全管理能力」の生成過程に凝縮されている。そしてこの凝縮「生きる力」のすべては経験「ポルターレ＝働く」の在り方に拠って練成されたのである。

「……私は、いま、あなたがたの前に、二本足で立っている。ところで、この『立つ』という漢字はどういう意味であるのか？ ……」

ボクはパフォーマンスを交えて黒板に「立」の字を大きく書く。その前でフロアを大地に見立てて両手を横水平に広げて仁王立ちになる。ついでに仕掛けを書き込む。

「……『立』の意味は人間が大地の上に両手を広げてスクッと立つ姿を現している。ボクは65キロの体重だから、立つためには、その『65キロ』の重力を打ち破る『生きる力』が必要だ。ならば、その『生』の字義を考えてみてほしい……」

と言ってパフォーマンスを続ける。66歳が、である。いまの若者には「話」だけでは通じない。だから、仕方がない。この場合の「通じない」についても本稿では「なぜなのか」を追って明らかにすることになるのだが、まずは、仕掛けに戻っておきたい。

黒板の「立」の字に見立てた仁王立ちの絵の左側に地面を突き抜けて地球の中心へと引っ張られる重力線「65キロ」を「黄色い線」で太く描く。黄色は警告のつもりである。矢印は下向き。仁王立ちの右側にはその黄色い線よりもさらに太く「赤い」チョークで力強い矢印線を描く。天に向かって伸びている。しかも、力強い。

「……この赤い太い線は何を意味してい

ますか？ これが「生きる力」なのです。みなさんはこの燃える赤色のごとく生きていますか？ 昨今見受けられるジベタリアンの赤い線は、色褪せてしまっていて、黄色い線より細いからではないのですか？ この事実は何を意味していますか？ 考えてみてほしい……」

そうだと発問しておいてから、次の仕掛けに入ることにしている。

「……それでは、『生』の字義の本質はなんだと思いますか？ ……」

原義は「土」のなかの「種（たね）」が生長して地上に芽を出して伸びる植物の生存様式を形象している。転じて「生きる」とか「いのち」とかを意味する。問題は、「芽が出る」の「出る」という自動詞にある。大地のなかから自ら「出（い）でる」ためには地球の重力を自ら破らなければならない。この「破る」は、このさい、生きるための「意志」である。さて、である。人間が立つためにはその「重力」を打破しなければならない。

「……あなたは重力と闘っていますか？
あるいは重力と遊んでいますか？……」

ボクの発問は禅問答に似てくる。ボクは不可避の重力に同調して遊ぶことを禅の起源であると考えている。坐禅の始まりを想起してのことである。黒板には万物を拘束する「重力線」を黄色い太線で描いてみせる。ところで「生きる」こととは、このさい、その重力線のときどきの在り方（自然強度）を打破する、「抗重力線」（天に向かって立ち出でる生きる力）のさまざまな在り方（生命強度）の問題にほかならない。

「……なぜ、『赤色』なのか？ なぜ、二倍以上の『太さ』に描いたのか？……」

2-2 「運動」の三様態

問答を佳境に導くことになる。加えて、三つの仕掛け絵をつぎつぎに描く。はじめに勾配の急な坂道を描く。球状の岩石を描く。絶

対受動様態の岩石は重力に引っ張られて転げ落ちる。これを「自然運動」という。そう説明しておく。つぎに「立」の字に似せて人間の線画を描く。鼻は坂上を向いている。登るためには自力で歩かなければならない。なにかを背負っておれば重労働になる。ときにそれは獲物の大きな「肉塊」かもしれない。これを「重力と闘う」という。または「重力と遊ぶ」という。そして、これこそを、二足ロコモーション生活者の「身体運動＝human movement」であるという。換言すればこれが人間の主体的な「ボルターレ＝働く」であると説明しておく。最後に線画で自動車を描く。アクセルを踏んで一気に急坂を走り抜ける。これを「機械運動」と呼ぶと説明する。

「……これが『運動』の三様態です。あなたの生活はいずれに慣れてますか？ ……」

ここで普通ならば発問を閉じることにしている。現実を見直してほしいのである。そこで結論を述べる。実に二足ロコモーション生活者は生活世界「ひと・もの・こと」に能動的に働きかけなければ生きていけない。働きかけるためには、まず、立たなければならぬ。このさい、「立つ」も、「働く」も、生きるために絶対受動様態（自然強度としての重力）を打破するところの、生命強度を発揮する能動様態である。この働きかけ（ボルターレ構造）は常に能動様態の「知性原理」主導における「生産管理機能」として発現する。つまり、人類の始祖は、その出立となった二足直立姿勢を獲得した400万年前の当初から本質的に知性的存在者であったのだ。だが、現代人には目に見えない落とし穴が待っている。この「落とし穴」の問題は前出の「運動の三様態」の問題と無関係でない。

3. 「からだ言葉」とはなになのか

ボクは痩せ我慢を生活信条としている。しかしこの痩せ我慢は、ボクにとって、少しも

無理でも苦痛でもない。たとえばボクは駅やデパートで階段を昇り降りする生活習慣を身につけている。だから仲間連れのときも、ボクの足は、ひとりでに階段を選ぶ。仲間には痩せ我慢にみえるかもしれない。でもボクは一向に気にしていない。

「……ああ！ しんどオ！ ……」

とボクは大声で叫ぶ。ボクはときに富士山に登ったりすることもある。そんなとき笑顔のボクは決まってこの「しんどい」を誰彼なく聞こえるように連発する。ボクは若い頃レスリング競技を遊んでいた。練習はしんどい。そこでもボクは大声で「しんどい」を連発していた。こうした経験を語り伝えるとき、決まってボクは、発問することになっている。

3-1 「しんどい」の意味は

「……大阪弁の『しんどい』を漢字で書いてみてください……」

また、みなが頭を捻りだす。となりの仲間と相談してもとにかく漢字を捻りだしてみよ、とボクは問う。ほとんどが書けない。その理由を「しんどい」の用法が逆転してしまっていることにあとボクは見抜いている。だから即座に種明かしをしなければならない。

「……『しんどい』は『辛労』と書いて形容詞化したもの。では、意味は？ ……」と改めて問う。念願の富士登山で頂上を踏みしめたとき、感動を覚えて発する「しんどい」は、いかなる意味であるのか。この自問にボクの身体運動論が「所」を得ることになる。

「……レスリング部の勧誘？ しんどいから、入部せよへんよ！ ……」

の語義とは明確に異なるはずである。もともと「しんどい」は、二足ロコモーション生活者が重労働（ボルターレ）を成就（辛労）したときに、つまり労働（生の原点）を辛抱しきったときに発する「からだ言葉」としての感動の表現である。自分で自分を褒める言葉なのだ。仕事を「やりとげたぞ！」と誰かに

認めてもらうための宣言なのだ。からだ言葉の発する「ああ！ しんどオ！」は、実に生活世界「ひと・もの・こと」との弁証法的交通をとおして、内なる生命の躍動を、まるごとの中から「60兆個の全細胞」で認得する直観原理の循環的表現であるのだ。ベルグソン(1859-1941)はこの経緯を「エラン・ヴィタル=elan vital=生命の躍動」(1907)と命名してそこに生命の本質があると見抜いたのであった。

しかしながら、現在の用法では、「しんどいから、やめとこか！」というように、時制がまったく逆転してしまっている。ここに問題がある。この経緯にさきに指摘した「落とし穴」が潜んでいるのである。

「……あんな高い山、歩いて登るの？

しんどいから、やめとくワ！ ……」

の問題は、「140億個の脳細胞」への過剰依存に拠る知性原理の「内制止」という、からだの表現の埋没現象なのである。そして、だからと言って機械運動「自動車」に身を任せるとき、からだ言葉としての「感動」は生まれない。なぜなのか。身体は、受動様態の重力との闘い(ポルターレ)を回避するとき、沈黙という迷宮を彷徨い始めるのである。実に、この「しんどい」は、環境情報とのかかわりにおける「生の循環」を表現してくれる協奏曲なのだ。

3-2 「顎を出す」の意味は

この直観原理と知性原理の働きの相違は「なに」を意味しているのだろうか。ボクは、日本の子どもの「生きる力」が奇怪しいと気になっていたので、1996年にとりあえず大学生を対象にして、ある調査を行ったことがある。この年、中央教育審議会が「生きる力」の問題をあらためて採り上げたことに触発されてのことだった。調査では、からだ言葉のひとつ「顎を出す」の語義を訊ねてみた。正解は3割足らず。誤解(無回答も含めて)が

7割を超えている。「偉ぶる」と思い込んでる学生もいるほどなのだ。驚愕してしまった。それから10年ほどを経た今日、ほとんどの大学生がこの「顎を出す」を解することもできなくなってしまっている。なぜなのだろうか。ボクの身体運動論は、この「顎を出す」ことこそ歴史的民族的にみて日本を代表する、からだ言葉であると考えている。だからこそ、スポーツの語義でさえ時代とともに変遷している経緯を認識していることにしても、これでいいのかと落胆せずにおられない。

いまでは「言わずと知れたこと」といえない。そんなわけで、「顎を出す(上げる)」の語義を、身体運動論の観点から、東西比較文化論として語源的に説明しておかなければならない。ヨーロッパ語族ならばいずれの言語でも意味を共通させて「顎をつき出す(上げる)」ことについて一様の生活現象を表現する。その経緯を「Keep your chin up!」という英語表現の命令文に代表させて説明してみたい。

「……この命令文を、身振り所作で表せばどうなりますか？ ……」

と発問しておいて、またもやパフォーマンスに頼ることになる。なにせ、「からだ言葉」が通じないのだから仕方がない。「chin」は「顎」。「up」は「上に」。「keep」は「保つ」。そのとおりを身体表現すればどうなるのか。姿勢だけは目に見えて日本語の「顎を出す」と同じになる。しかしこの状況を無視する真似事のみでは「自己を語る身体表現」(からだ言葉)としての意味が通じない。このさいの「自己」の存在様式こそが先行問題であるのだが、しかしここでは、知識的言語表現に頼らざるをえない。

「……日本語の『顎を出す(上げた状態)』は、諦めるとか、仕事を途中で投げ出すとか、ひと休みするとかを意味している。転じて、顎を出したと指摘されれば、『意気地なし』などと非難されているこ

ともなる。だが、しかしである。英語に言う『Keep your chin up!=顎を上げろ（出せ）』は、その日本語とまったく意味を正反対にして、『頑張れ』とか、『しっかりせよ』とか、『いまから仕事を始めよ』とかを意味している。同じ身体表現（顎を出す・顎を上げる）が、なぜに、東西文化においてその意味をまったく逆転させて異にするのだろうか？ 理由があるはずだ……」

ボクは、この「なぜに」の説明に、ボクの専門の「身体運動論」が役立つと自負している。哲学的な「身体論」やスポーツ科学的な「運動論」に拠っては誰もが説明してくれていないからなのである。そして前出の「自己」という人間存在論の問題をもこの「なぜ」を問うことに拠ってボク流に身体運動論で説明できる。ところが、である。説明は太古からの「そもそも」から始めなければならない。大仕掛けを要するのである。

4. 大脳地図

ボクは自作の創作寓話劇をひとり芝居で演じてみせる。パフォーマンスなのである。聞き手との対話を膨らませる工夫というわけだ。

「……アッ！ 獲物だ。見つけたぞ！

遠方だ。急接近しなければ逃げてしまう。

二足を働かせ。全速力だ。走れ、走れ、走れ！ おのれを、仲間を鼓舞する……」

この身体運動の過程には意欲の喚起と身体運動論理の必然と危険因子の偶然とがある。

「……仕留めた。これは大物だ！ さあ、二つの手で手際よく解体しよう。切り割かなければ重すぎる。みんな、自分の手を切るナ！ 両手を巧みに回転させろ！ ……」

この身体運動の過程には創造性の賦活と変形工作論理の必然と危険因子の偶然がある。

「……分担して運ぼう。さあ、出発だ！ 全身で働け！ 辛勞が始まるぞ！ ……」

この身体運動の過程には重量物長距離運搬能力の賦活と労働使命の自覚がある。

「……仕留めたのはお前だ！ 追うとき身のこなしが凄かった。振じる。屈む。伸びる。跳ぶ。廻る。全身心で、咄嗟に危険を回避した。お前は名ハンターだ！ ……」

この身体運動の過程には生産管理能力と安全管理能力との弁証法的賦活がある。

「……運び帰る仲間は全身心を使う。突き出ている大木や落石に気をつけろ！ みなが直観を研ぎ澄ます。頭をぶっつけるナ！ 足を滑らすな！ 獲物を運び帰ることができなければ、一族が、餓え死んでしまう。危険を回避せよ！ 安全第一だ！ ……」

この身体運動の過程には生産管理能力と安全管理能力と重量物長距離運搬能力との弁証法的賦活がある。そして、ここで付け加えて、「黄色い重力線」と「赤い抗重力線」とのことを振り返ってみることにしている。

「……さきほど黒板に描いた『赤い抗重力線』のすべての論理がこの創作寓話には含意されている。ところで、『赤色』と『二倍の太さ』はなんであったのか？ 『赤』はあなたの燃える『いのち』の象徴です。『二倍』はあなたの『生きる力』の可能性を象徴しています。あなたは、そのように燃えて、可能性を膨らませていきますか？ ……」

と、まず象徴的に問う。そして、やおら付け加える。

「……あなたは、重力と、闘っていますか？ 重力と、遊んでいますか？ ……」

4-1 「400万年間」の智慧

ボクたちの祖先は間違いなく400万年間を、男も女も、大人も子どもも、青年も老人も、こうして生きてきた。生活してきた。働いてきた。辛勞してきた。証拠がある。ペンフィー

ルド（1891－1976）に頼ってみたい。

脳細胞は痛覚をもっていない。そのため、1948年に、脳外科医のペンフィールドがある実験に成功している。痛覚をもたない脳細胞に電極を差し込んでも患者に別状は生じない。しかし電極を差し込めば、その部位に対応して、身体のアチコチがピクピクと動く。手が動く。足が動く。口が動く。目が動く。耳が動く。患者が、無意識のままに、「音が聞こえる」「川が見える」と喋りだす。記憶の層に電極を差し込んだのであった。発見だった。ペンフィールドは、この手術をきっかけにして、多数の実験での「ピクピク」と「喋る」とを合成してみることを思いついた。そして、電極を差し込んだ脳の「体性運動野」と「体性感覚野」の別々に、たとえば「手のピクピク」「足のピクピク」の部位ごとを合成すれば、「脳細胞」のどの部位が「手」と「足」を動かして、また「手」と「足」から感覚を受けているのかが特定できる。こうして、同じ反応部位のすべてを部位別に合成すれば、精密な脳の働き機能を表す「大脳地図」が完成する（ペンフィールド・1955）。

なるほど、その「大脳地図」をみれば、一目瞭然である。「手」「足」「顔」の機能部位がその他の部位に比べて格段に大きい。人類は、始原から数えて400万年間を、上記のボクの創作寓話劇のとおり、自分の「手」と「足」に頼って生きてきたのである。結果として「脳機能」がそのように形成されたのだ。可塑（適応）性の原理の必然であった。ボクは、だからこそ、この「大脳地図」をみせて誰彼となくすべてに告げる。

「……だから、『足』を使え！ 『手』を使え！ 重力と闘え！ 遊べ！ ……」と、おしなべて手足を使わない運動不足の現代人を意識して、ボクはこの科学的知見「大脳地図」をフル活用するのが常だった。そして、1980年代までのボクの日常では、「だから」「使え」「闘え」「遊べ」と発問し続けた

のである。言い換えるならば「運動」の能動様態性の効用に固執していたのであった。しかしながら、「90年代」になると、「はたッ」と気づいて、ボクの発問は変わってしまった。

「……あなたの大脳は、たとえば電極を差し込まれても、直接に『痛み』を感じることがありません。このことは、なにを、意味していると思いますか？ ……」

われわれの過信しがちな大脳は、単なる「経験情報」の貯蔵庫であって、その情報を選別して行動設計を行う管理棟にすぎない。ところで「経験情報」は、いずこから、いかにして、インプットされるのか。問題がここにある。「痛い」は身体で経験しないと大脳に安全管理情報として蓄積されない。さて、「痛い」経験も「辛い」経験も「苦しい」経験も「労（はたら）く」経験もすべてが、生身のからだ「60兆個の全細胞」をフル回転させる等身大の二足ロコモーション生活を経由してのみ、撥ね返ってくる生身の環境情報として脳機能「140億個の脳細胞」に刻み込まれて蓄積されることになる。しかも、すべては受動様態においてしかインプットされない。

さても「80年代」までの日本社会には「ソレイケ」「ドンドン」の空気が漲っていた。「土地開発」「日本列島改造」「体力増強」などの能動様態思想が世相をリードしていた。いきおいボクの「大脳地図」活用術も付和雷同してしまっていたわけである。だが「90年代」になると、ボクの反省は、「身体」の受動様態性に注目するようになっていた。

4-2 「プラスとマイナス」の思想

ところで、ボクが「はたッ」と気づき（伴・2005）だしたところから、「モノ化する身体」「離陸する精神」という身心の不調和状況の進行するさなか、加えて「閉塞する感性」「埋没する表現」という人間と生活世界（ひと・もの・こと）との遮断状況が散見される

ようになってきている。そして、ボクは、そのころからの世事に暗い気持ちにならざるをえなかった。

「……自己の身体髪膚で『痛み』を経験したことのない人間には、痛みの本質を理解できるはずがない。ウムっ！ だから、凄惨な事件が頻発するのではないのか？ ……」

ちなみに国語辞典で「痛み」を引いてみればよい。「痛むこと」とか「苦痛」とかと書かれてある。これでは、「赤」は「赤い色」と説明することと同じで、トートロジーでしかない。実に「アッ！ 痛い」は「からだ言葉」なのである。文字言葉は定義でしかない。定義では「からだ言葉」の本質を伝えることができないのだ。ここに、前出の問題提起「自己とはなになのか」という命題をひもとく鍵がある。

「……黒板に向かって左に『快・楽・遊』群がある。右側に『辛・苦・労』群がある。あなたがたは大書した二つの語群のイメージをどのように捉えますか？ ……」と、まず、発問する。そして前出のからだ言葉「しんどい」の真髓の再考をボクはあらためて求める。現代人は計算高い。計算（比較）する頭は、「快・楽・遊」群をプラスイメージで捉え、「辛・苦・労」群をマイナスイメージで捉える。この性向を承知のうえで前出の創作寓話の例を借りて少しを補足しておきたい。生きるために「獲物を追う」ことは獲物と闘う能動様態で知性原理主導の生産管理能力を発動しなければ成就しない。一族のためにその「獲物を負う＝運び帰る」ことは重力と闘う受動様態で直観原理主導の重量物長距離運搬過程における安全管理能力を発動させなければ成就しない。現代人は間違いなく前者をプラスイメージで捉え、後者をマイナスイメージで捉える。なぜなのか。

「……苦は楽の種（たね）、楽は苦の種 ……」

かつての等身大の二足ロコモーション生活においては、能動様態と受動様態の表裏一体で織りなす弁証法的関係として、上記のような「ことわざ＝からだ言葉」が智恵として働いた。人類が400万年間をかけて培ってきた身体髪膚に刻印されている知的財産であるからなのだ。しかしここに指摘する「苦」か「楽」のいずれかにイメージを固定させてしまえば、苦と楽の円環的な「生の循環」が途絶えてしまうことになる。かつてベルグソンがこの経緯を言い当てて「知性の固定化」（1907）であると看破した。そして、生身の「からだ言葉」の智恵の解放を願って、直観（本能）原理の見直しを訴えた。いみじくも知性原理を本質とする能動様態的な生き方だけに頼っていたのでは人間性が損なわれると危惧してのことである。つまり能動様態の「獲物を追う」も受動様態の「獲物を負う」も、両者が弁証法的に連動しないとき、本物の生業「生きる力＝ポルターレ」は体現化されないのである。

さきにボクは「生」の字義を披露しておいた。そして生きることとは、地中の「種」が、絶対受動様態の「重力」と闘って打ち克ち芽を出して天空に向かって能動様態で伸びるさまを表現していると説明しておいた。生きることとは受動様態と能動様態の協奏曲なのである。人間の場合ならば、その生の循環過程に、身体が介在する。そして、受動様態と能動様態とが弁証法的に働く。まるごとの身体運動の論理はかくも生活訓を学ばせてくれるのだ。そしてその智恵「生活訓」は400万年間の人類史を通じて現代人の大脳地図にも潜在的に遺伝情報として刻印されているはずなのである。それなのにイメージ（知性）の固定化はなぜに起こるのであろうか。知性では、機械に代行させさえすれば、すべてを苦もなく楽にできてしまうと即座に計算できる。この合理化への傾倒こそが「なぜに」の回答ではある。それでは、日本語の「顎を出す」の本質問題を追究することにしたい。

5. 第二次「二足ロコモーション革命」

まず日本流のからだ言葉「顎を出す（上げる）」における意味生成の定着過程をみておかなければならない。ボクの「身体運動論」（注：「身体論」ではない）では、その淵源を、1万年前の「大変」にあると見定めている。

400万年前、すべての始祖が、二足ロコモーション生活者に転身した。見定めは、この第一次二足ロコモーション革命から時を経ること399万年間の悠久の進化史をとおして、ヒトの時代も、旧人の時代も、新人の時代も、古代人の時代も、さきにみてきた創作寓話劇のように、すべてが「身体運動論理の智慧」を基本的な生存戦略にして、道具をつくり、使用して、開発しながら、獲物を追って生きてきた。それは、自然への、果敢な挑戦であった。そうでなければサバイバルできなかった。だからこそ、すべてが、「顎を上げて（出して）」「前を見通して」、「keep your chin up!」の原義どおりに生計を立ててきた。そして、一万年をはるか前までの地球には、大いなる包容力があつた。いくら狩っても「マンモス」がふんだんに棲息していたのである。

一説に拠れば前期石器時代（200万年前～10万年前）の地球人口はおおよそ12万人しか数えないらしい。中期石器時代（9万年前～3.5万年前）になって100万人。後期石器時代（3.5万年前～1.2万年前）には300万人。このころともなれば初期の原日本人が活動しはじめていたらしい。だがしかし、その「300万人」が地球上のマンモスを狩り尽くしてしまうのである。そういう学説もある。そうならしまえば、獲物を追う走り働き性の「獲得産業経済」から、計画的に牧畜を営んでみたり農作物を作る「生産産業経済」への政策転換が必要になる。この生活革命が、ボクの命名する、第二次二足ロコモーション革命である。そしてこの革命は、いったい、なにをもたらしたのか。

5-1「原日本人」の出現

ユーラシア大陸では、こうして紀元前5000年ころからおおよそ2000年をかけて、原初農耕文化が全域に拡がっている。人類史の教えてくれるところ、この時点で、定住化を動因として人種と語族（言語）の分化が始まっている。ところが、である。広大な空間（大地）を有するユーラシア大陸では、この第二次二足ロコモーション革命という決定的な生活革命においても、「顎を上げて（出して）」前方を見通す「走り働き性」を原点とする身体運動論理の形成した思想性そのものを変革する必要がなかった。つまり広大な有り余る平原「大地」が、それまでのマンモスに代わって、知性原理と競争原理の能動様態発想で開拓すべき対象と見做されたのである。人類史がそうだと語っている。そして身体に刻み込まれている「keep your chin up!」の心性はそのまま引き継がれたのである。

「……さて、この『心性』こそが、近代ヨーロッパ科学主義の源流なのです……」

ボクは、学生などを前にするとき、ついでは端的な事例を、古代のプラトン哲学や近代のデカルト合理主義などから知性原理の特異化する走り働き性論理の発想を借りて、少しばかり説明を加えることにしている。しかし、ここでは話を転じておきたい。

一万年、何が起こったのか。日本列島は、地球環境の温暖化で「氷」が溶けてしまって、それまで凍てつく海を介して陸続きであった大陸から、分断されてしまった。分断された日本列島には、狩り尽くされてしまって、狩猟生活に足る大型の獲物はもはや存在しない。「顎を上げる（出す）」生業がなりたたない。399万年間を頼ってきた走り働き性の生活様式を断念せざるをえなかった。だが、生きていかなければならない。こうして始まった日本列島の第二次二足ロコモーション革命は、縄文時代を経由しながら、特異な生活文化を形成することになる。大陸からの分断。この

事実は、本格的な農業革命の文化伝来を、8000年後の弥生時代まで遅らせた。人類史の通説である。

「……この8000年間は、ボクの身体運動論からすれば、『原日本人』を造ったと考えている。からだ言葉「顎を出す」の生活思想の源流もこの8000年間における生活革命において萌芽したのだと考えている。そしてつい最近までは、日本では、子どもまでもが『顎を出すな!』と言われたならば、みなが頑張っていた。それなのに、どうして、2006年状況の現在では『死語』と化しつつあるのだろうか？……」

と発問することになっている。縄文時代の原日本人は採集労働と漁労労働を基盤とする「ポルターレ」を主たる手段として生活している。これは決定的な変革である。生き方のパラダイムの180度の転換である。原日本人は、獲物を追う「顎を上げる＝顎を出す」「keep your chin up」「前方を見通す」労働形態から、「顎を引いて」、地面や海面の「足元を見つめる」労働形態へと正反対に転換せざるをえなかったのである。生きるためだった。

「……ユーラシア大陸には、征服すべき、広大な平原が存分に有った。日本列島には、無かった。もう新天地を求める走り働き性論理では生きていけない……」

だから、水稻文化の伝来する8000年後の弥生時代ともなれば、この労働形態はさらに固定的に特異化してしまう。視線を足元に据えて、腰を屈めて、狭隘な水田と長時間を格闘する。その「重力」と同調して格闘する粘性のある重労働が、すなわちこれまでの走り働き性のポルターレには決して見ることでできなかった重労働が、つまり原日本人の顎を出さない「立ち働き性」のポルターレという身体運動論理が、原日本人のすべてを形成することになる。大陸からの分断という制約。狭隘な土地という不足。不可避の重力。いずれ

もが、原日本人が背負わなければならなかった、そして逃避（dis）することの不可能であった、絶対条件的な受動様態（portare）であったのだ。この特異な風土との同調と共生とを余儀なくされ、そして、風土に馴染こむ粘性を練成する格闘が始まったのである。この経緯について、和辻哲郎（1889－1960）が、風土と人間との関係によって形成される「自他不二」思想をうらづける、日本人の生業のいかほどかを語っている（1935・1937）。このさい、「自」とは働くからだのことである。「他」とは風土である。「不二」とは「からだ」と「風土」との同調であって共生である。つまり原日本人は、自然を征服すべき対象として捉えるのではなく、自然との不二密着を余儀なくされる前人未到の生活術を、新たな環境のもとで革新せざるをえなかったのである。

意欲とは合目的な意識の持続にほかならない。意識とは環境と行為の弁証法によってのみ練成される行動の産物である。その意欲と意識の発現環境が大転換してしまった。この試練は人類文化史上はじめての経験であり桎梏であった。ここに原日本人の原初的心性が発酵するためのあまりにも特異な源泉を見つけることができる。葛藤もあっただろう。戸惑いもあっただろう。399万年間の「走り働き性」の血が、魂が、智恵が、精神構造が、60兆個の全細胞にインプットされつづけてきている。そこに蓋を閉めてしまうわけだから、原日本人にとってこれは厳しい試練であった。顎をつきだして前方を凝視する生活から、原日本人は顎をひいて足元（海原・大地）を凝視する生活へと轉身せざるをえなかったのである。だがなにはともあれ、この「桎梏」を乗り越えることのみにはしか、原日本人がサバイバルする方法はなかった。人間は随意運動の主体者（知性原理主導の二足ロコモー

ション生活者)である。個々の身体運動の集積が生活を形成するのであるから、顎を「出す・あげる」から「ひく」仕事ぶりへの転換は、必然的に意欲の質的変容をも喚起する。一言でいえば意欲が粘性をもつことになる。もちろん感性も変わる。情性も変わる。知性(の発現方法)も変わる。知性が意欲の桎梏から離脱して働くことを可能にするものを、鈴木大拙(1944)は霊性とよんだ。意欲の桎梏から離脱することとは、言い換えれば自然のリズムに同調することでもある。

(伴・2000・括弧内補注今次)

この自然のリズムへの同調にこそ日本人の「自己を語る身体表現」の原点がある。やはりこの「一万年間」は実に独特なのである。

さて、20世紀末から昨今にかけて「縄文研究」なるものが盛んになってきている。その一万年間に日本の基層文化が開化したと見做す梅原猛(2004)が呼びかける。梅原は「人生いかに生きるべきか」の問題を追求すべき哲学の原点を「縄文時代の世界観」に模索して次のように展望する。本稿の同調するところである。

縄文時代の世界観は生きとし生けるものとの共存の世界観であり、そして生きとし生けるものがすべて、この世とあの世の間を循環する世界観であるということがわかります。……「生命の永久の循環」という考え方は、生命というものを遺伝子と言い換えれば、まさに現代の科学の解明した世界観であり、これこそ今後の人類に必要な世界観であります。

5-2 「身体表現」の二様態

かくして原日本人は「顎を引く」生活文化を身につけざるをえなかった。補足しておきたい。釣針の餌にかかる獲物を待つ釣魚はまさに一定の場所における「立ち働き性」の典型的な労働なのである。顎を引いて足元(海

面)を見つめて働けば、しかも根気よく時間をかければ、それだけで普通は漁獲高が上がる。この「待つ」の労働形態はコツコツと一所(ひとところ)で働けばそれだけ収穫が増すという田畑仕事に基本的に通じている。

逃避不可能な桎梏から生まれたこの労働形態は、狙い定めた獲物を追うあの走り働き性の労働とは、つまり広大無辺の自然を開拓する「不定直線運動性」の労働とは、対照的に人間力のすべてを異にする。400万年前に第一次二足ロコモーション革命を成し遂げたボクたちの「始祖」は生存戦略である「知性」を鍛えるために「意志」を合理的に練成した。獲物を追う。走る。マンモスを狩る。闘う。肉塊を運び帰る。獲物を負う。歩く。ときに長旅だった。だから「意欲」が鍛えられた。自然を征服するという意欲が、その発現体の身体運動が、人間を造ったのである。この意欲の涵養様態が、すなわち「ポルターレ」の源流が、原日本人にとっては、第二次二足ロコモーション革命を契機にして、「走る」から「立つ」へと、「動」から「不動」へと根本的に変わることになった。捨象しきるならば、自然を征服する意欲から、自然と同調せざるをえない意欲へと変容したとみてよい。

日本人の労働形態を別の言葉で表現すれば「定常円環運動性」ともよぶことができます。つまり常に限定された一定の場所での「堂々めぐり」に等しい円環的身体運動の労働で、日本人は、生計を立ててきたのです。いわば「不動性」の生活形態と言えます。また、田畑を耕す鍬や鋤などを操る運動形態は振り下ろして内側に取り込む繰り返しの「円環運動」を主体にしたものですし、稲刈りの鎌で行う収穫運動も横になぎって内側に取り込む「円環運動」なのです。この円環運動の本質は必要な分だけ「取り寄せる」やさしい働きなのです。そして、その定常円環運動性が、そのまま土地に人間を縛

りつける、日本人の生活形態として根づいてしまいました。だから、日本文化の源流こそは、すべてこの定常円環運動性に由来しているのです。日本人の血にも、筋肉にも、身体にも、心根にも、思考にも、精神にも、すべてにこの「立ち働き性」に由来する「定常円環運動性」が刻印されています。そしてその刻印こそは日本の風土における「しんどい」労働形態が規定してきたものなのです。（伴・1990）

実にこの「顎を引く」という特有の「ポルターレ」が「原日本人」を造ってきたのだ。絶対受動様態の「しんどい生活」を余儀なくさせる風土が原日本人を造ってきたと言い換えてもよい。しかしこの「ポルターレ」と「風土」との関係における「身体表現」には本質的に二様態があることに注意しておきたい。二様態とは「走り働き性」と「立ち働き性」の身体表現の対照的な様式にほかならない。前者は「自然」を征服すべき「二項対立発想」の対象として捉える。後者は「自然」を自他不二の「同調発想」で捉える。いわばこの二様態の生活的発現こそが「西洋思想」と「東洋（日本）思想」の枝分かれの原点なのだ。そして「枝分かれ」に至る源泉こそは、原日本人のみが遭遇することになった、実に回避（dis）することのできなかつた「一萬年前」の「宿命」に在ったのである。

6. 可塑性の原理

目下の課題である「顎を出す」の原義を求めて説明が原理的になりすぎた。だがもう少しを原理的に語らなければならない。もうひとつの仕掛けから始めたい。まず、問う。

「……チューリップのイメージ画を描いてみてください！ ……」

誰もが長い茎の先に一輪の大きな花のひらくあの典型的な「単花」の絵を描く。チューリップは人間が原種に手を加えて栽培加工し

た観賞用植物である。そこで、また問う。

「……さて、チューリップの球根を野晒しにしておく、どうなると思う？……」

たまに「単花」でなく「多花」を咲かせることもあるらしいと告げておく。すぐに種明かしをする。実のところチューリップは、原種において、単花でなく「多花」を咲かせていたのである。この珍しい人工栽培花をめぐる、近世初期のヨーロッパでは、球根投機が過熱化して価額の急騰や崩落をひきおこし、チューリップ恐慌という時代状況をみせたこともある。みな「珍花」の開発を競って、手「外制止条件」を加え続けたためであった。ところで球根を野晒しにすればその外制止条件がはずれて「先祖がえり」を誘発できることもあるらしい。そして、ときに、「多花」が咲くこともあるらしい。単花だという思い込みは実に現代人の知性の固定化現象の典型例なのである。

6-1 「生命体」の決定論

このチューリップの先祖がえりの事例に「生命体」の決定論をみつけることができる。その決定論について非生命体「石油原料プラスチック」の事例を借りて説明してみたい。

「……みなさんは、化学物質を原料とするプラスチック製品を知っていますね……」と切り出すことにしている。プラスチック製玩具がアメリカに登場して珍重されだしたのは1941年のことだったらしい。そして、この便利商品が日本へ上陸したのは1950年のことだそうである。そして、現在では、世界中に氾濫してしまっている。

「……原型にプラスチック樹脂を流し込めば同じ『コピー』が大量生産できます……」

だから「便利このうえない」と同意を得ておいてから、「本当ですか？」と反問パフォーマンスが始まる。まず黒板に英語で「plastics」と大きく書く。そして、語義論が

続く。

「……英和辞典で名詞形の『plasticity』を引いてみてください。可塑性とか柔軟性とか適応性とかと訳されています。実にこの言葉の意味は根源的な生命論なのです……」

近代科学主義は、根源的なこの「可塑性の原理」からヒントを得て、わずか半世紀ばかり前に化学製品の「プラスチック」を発明している。爾来、世界中で、生活必需品の簡便な原料として活用されだした。そこで再び「本当に便利なんですか？」と訊ねる。

「……語源はラテン語の『plasticus』です。この言葉の源流は古い。古人は生命体の決定論を経験問題として見抜いていたのです。驚くことに、『可塑性の原理』の本義を、『言語表現』におい日常的に使っていた。可塑性とは、簡単に言ってしまうと、生存条件としての周りの環境に適応させられて馴染みこんでしまうということです。つまり、先の話のとおり、原型に流し込めばプラスチックは条件どおりの形に固まってしまう、その原理を言い当てています。換言すれば環境条件にそのまま適応してしまうことです。実にこの決定論はあらゆる生命体に働いています。ラテン語『プラスティカス』の意味は、もともと生物の生命現象形成過程の本質状態『仕組みの決定論』を表現しているのです。そして直訳するならば、所与の環境に応じて、『いかようにも形成しうる・されうる』ということなのです……」

古代人は経験知としてこの経緯を生活感覚として肌身で体得していた。だからやがて近世ヨーロッパ人は、逆説的に、チューリップを剪定しつづけたのである。人間の「手」が外制止条件を拵えたと言い換えてもよい。つまりは人間の恣意で、本来の生命体のあり方（個性＝自己）を変形工作して、単花に仕組

み込んでしまったのであった。

「……この可塑性の原理が物質に働く場合はプラスチック製品のように『便利』かもしれない。しかし、石油原料プラスチックは、いかなる条件のもとにも先祖がえりができません。つまり元の無害の形に分解することができないのです。だから地球がゴミ公害に悩まされている。近年、トウモロコシを原料とする、新素材のプラスチックがやはりアメリカで開発されています。そしてこの新素材プラスチックは分解できるらしい。でも、である。問題は深刻である。問題は、この可塑性の原理が、『人間』に誤って働けばどうなるのかということなのです……」

6-2 「かかわり」の遮断

大袈裟なパフォーマンスの出番がやってくる。黒板にチューリップのイメージ画の登場である。このさいチューリップを現代日本の若者に喩える。聞き手は大概が不愉快な顔となる。「いまの若者はダメだ！」とボクが非難しているように受け止められてのことであろうか。さらに多くが「こんな抽象的な話は判らない」と愚痴を漏らす。ボクは生真面目に最も原理的にかつ具体的に話をすすめているつもりなのだが、とにかく通じにくい。

「……現在は個性の時代だと言われている。だから教育方針も個性の育成を前面に押し出す。ところで、あなたがたがイメージ画のチューリップだとする。誰が見ても一様です。まったく個性的でない。個性を発揮したいあなたは、どうしますか？ ……」

聞き手の目が一瞬だけ輝く。誰もが個性的でありたいのである。ボクはつづける。

「……みな一様だからそれぞれ工夫しますね！ ピヤスを耳につける。臍や唇にもつける。ルーズソックスをはく。携帯電話で遊ぶ。メールにのめりこむ……」

と話を合わせながら、ボクは、黒板のイメージ画にピヤスやルーズソックスを描き込む。そして結果的にボクが決定パンチを放つことになってしまう。聞き手に堪えるらしい。

「……いくら人工物で飾っても個性は生まれない。いくら人工道具に頼っても個性は生まれない。誰もが利用しだせばすべてが一緒。これでは『自己を語る身体表現』のまったく逆です。これでは『語らない身体』を自ら搾取してしまうことになる。自己とはなんですか？ 自己こそが個性です。では、どうすべきか？……」と発問しておいて、チューリップの原種を描くことにしている。多花の絵である。茎が多い。パフォーマンスが茎に鉄を入れて次々にちょん切ってしまう。そして一本だけ残す。

「……現在の日本の子どもはこの外制止条件で捏造された『一本』の茎に個性的な『花』を咲かせることを要求されてはいないか？ あるいはプラスチック製品のように原型に嵌め込まれて一様に仕立てあげられていないか？ あなたはどう思う？ ……」

ここまでパフォーマンスが進めば多くの聞き手は可塑性の原理の重大性に気づく。しかしながら、ボクの決定パンチは、数少なくない若者に「悪いのは現在の子どもたちではない。悪いのは私たちではない。悪いのはそのような社会を作った大人たちだ」という知性原理の反論を主張させることになる。主張は「100パーセント」正しい。ところで、この「悪いのは」という主張が出てくる前に、ボクは決まって子どもの遊び構造の比較文化論を述べてみることにしている。

「……現在の子どもたちには遊び『空間・時間・仲間』が無いと言われている。いや『無い』のではない。かつての子どもたちと比べて『遊び』の内容が変わったのである。たったの三十年ほど前まで、空間は路地裏であったし、野山であった。

時間は子どもの尺度であったし、仲間はまるごとのからだでぶつかりあった。では、2006年状況の遊びはどうなのか？ 仮想空間。夢想時間。相手は無機質ゲームやインターネット機器。すべてが無機質環境の包囲である。つまり、血の通わない世界である。あなたがたはこの現実をどう受け止めていますか？ ……」

すべてが経済優先原理で捏造された遊び環境である。この事情のもとで可塑性の原理が子どもたちに働けばどうなるのか？ しかも、である。犠牲者は子どもだけでない。その顛末を要約しておこう。

◇耐性虚弱・制御力不足ですぐにキレる若者。

◇透明な存在である僕と私がしでかした残虐事件。

◇心臓弁6960ドル・人工臓器売買活況。

◇援助交際は消費と欲望の過剰側面。

◇学校や会社を忌避する引き籠り激増。

◇仲間内ネットワーク仮想空間依存症の閉塞社会。

◇子育て放棄蔓延の虐待社会。

◇働きたくない・学びたくない症候群の出現。

これらの現代日本状況の点描（高橋・2004・引用者脚色）は、すべてが、人間と生活世界「ひと・もの・こと」との「かかわり」の遮断において惹起されている。すべては、「身体」の受動様態性と「精神」の能動様態性との分裂結果として顕現する、「モノ化する身体」「離陸する精神」「閉塞する感性」の問題である。さても「かかわり」とは、受動様態の可塑性の原理が生身で働かないとき、遮断されてしまうものなのである。

「……思い出してほしい。先にボクが二足ロコモーション生活者の由来についてコンコンと話したことを。『しんどい』の原義を思い出してほしい。俚語の真意を思い出してほしい。『苦は楽の種、楽

は苦の種』の生活訓を思い出してほしい……」

と、哀願調にさえなって、ボクは再びペンフィールドの「大脳地図」を援用しながら、話題を転ずることになる。けれども話はやはり「からだの原点」の問題になってしまう。ここでは、あらためて「自己」の本質について直接話法で検討してみたい。

7. 川中論理と川岸論理

先に見てきたように大脳地図に収められている「手のピクピク・足のピクピク」「音が聞こえる・川が見える」の脳機能部位に電極を差し込めば反応がある。反応とは、前者では対応運動の『身体表現』としての『ピクピク』であって、後者では対応記憶の「言語表現」としての「喋る」であった。実験上のことであるとしても、この人為的刺激と反応との関係が、実に坐禅の極意までも示唆してくれているのである。

坐禅とは直立を収めて零度に戻し、人間に無から出直す可能性を与えます。……つまり、坐禅とは、自分自身の存在を置き直すことなのです。どこに置き直すかという、自分の本来のあり方（零度）に置き直す。（上田・2002・括弧内補注引用者）

直立すなわち「立つ」ことは、能動様態としての「いまから、ポルターレを、はじめる」ための知性原理発動である。「坐る」は受動様態の原姿勢である。坐って在る。この在ることをつづけるためには「すべて」を受け入れなければならない。坐禅は独特の文化である。すべてを受け入れるために、知性原理を零度に収めて、直観原理に身体髪膚を完全に委ねてしまう。坐禅における「独特」は自己存在を内観するための典型的な受動様態を意味している。すなわち「零度」にある「自分自身」の在り方を問い直すことになる。そこでの「無から出直す」「自分自身の存在を置

き直す」ということは、いったい、どういうことなのか。この構図に大脳地図論理の「刺激と反応」の関係を当て嵌めてみたい。ペンフィールドの実験では患者は完全な受動様態である。すなわち、状況こそ異なるものの、完全に「坐る」状態にあると見做してもかまわないだろう。

7-1 「川中論理」と零度の立場

この場合の「零度」の問題をわかりやすく説明するために、湯浅泰雄（1925-2005）の思想からヒントを得て、ボクが命名した「川中論理」（受動様態の触覚優先原理）の立場という仕掛けを提示して説明してみたい。川上から流れてくる「笹舟」をたとえばボクという実践者が掴み取るという場面を設定してみよう。

（「川中論理」における時空の見方では）実践者である「私」は川の中に入ってゆく必要がある。この場合、上流は（後出の「川岸論理」の立場と比べて）逆に「未来」を示すことになる。……そして（あちらから・未来から）流れてくる（笹）舟が待ち受けている「私」にぶつかった瞬間が「現在」である。舟をつかまえようと思えば、私はその瞬間に決断しなければならない。次の瞬間には舟は下流に流れ去る。出来事は「過去」になってしまう。（湯浅・2001・括弧内補注引用者）

この引用文の立場「待ち受けている『私』」が、すなわち上記にいう「零度」なのである。人間が「零度」にあるとき、つまり世界の真只中に坐してあるとき、すべてを待つしかない。なにを待つのか。あちらからやってくる「偶然＝インプット情報」をである。

「……人間はインプット情報を五感で受けとめます。視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚で受けとめる。さて、川中論理でインプット情報を受容したらどうなるのか？……」

湯浅指摘を援用したい。このさいインプットすべき情報とは笹舟である。上流（あちら・未来）からやってくる未知の「到着情報」である。まるごとの『ボク』（60兆個の全細胞）にぶつかる瞬間「いま・ここ」に間髪を入れずに情報処理しなければならない。そうでなければ、笹舟を見逃してしまって、すべてが「あとの祭り」（過去の出来事）になってしまう。だから「インプット」される情報を全身心で受けとめる。このさい、たとえば笹舟をつかもうとする情報処理こそは瞬時の決断で発動させなければならない。だからボクは即座につかみとる。この「つかむ」は、全身心の一致のもとに働き出でる「身体表現」（ポルターレ）であって、情報処理方法としての「アウトプット」（ポルターレ）である。さて、このさい「インプット」と「アウトプット」とを循環させるものはいったいなのかな。

ボクは、400万年間を累乗的に培養されながら連綿と受け継がれてきて大脳地図に刻み込まれている、すべての蓄積経験情報の一斉覚醒としての起動がそうあらしめると考えている。この経緯は、西田幾多郎（1870－1945）流に言えば、すべてが共振して即座の「純粹経験」（1911）を介して成就してしまうとみてよい。あちらからやってくる未知情報「笹舟」をまるごとのからだで感知して、一瞬にして大脳地図の内包情報と培養させて、関与の如何を身体表現として爆発させる。この爆発（岡本・1999）の喚起する仕組みが「生の循環」である。この爆発が「生きる力」である。この培養は「人生」である。この培養と爆発が「生」の証明である。実にこの「培養」と「爆発」との弁証法的循環こそが「自己を語る身体表現」ということなのだ。そしてこの「培養」と「爆発」の循環構造こそが「自分事」なのである。この経緯において「自己」が形成されることは言うまでもない。

「……岡本太郎も言ってます。『芸術は

爆発だ!』と。あなたは どう思う? ……」

このくだりを話し言葉のみで説明するのは難しい。客観的に説明できる「他人事」でなくて、血の通った主体的で個性（個別）的な「自分事」であるからなのだ。言葉のみではいかに工夫してみても淡々としか響かない。だからやはりパフォーマンスが必要になる。黒板に「川中論理」の情景描写をリアルな線画にして示す。赤や黄色や青のチョークも使う。さらにボクの身振りと手振りが加わる。ところで、インプットの在り方には、通常のところ「五感」という「五種」がある。だが、アウトプットには「動く」（表す）ことのみ「一種」しかない。ところで「五種」と「一種」とが「からだ」において直截に呼応して循環することを爆発という。ベルグソンに言わせれば、この爆発こそが、「生の躍動」そのものなのだ。このさい、喋るも、書くも、実に「爆発」を表すための身体運動であるのだ。しかし、である。留意しておくべきことは、生の営みはこの「5対1」の循環構造の只中にしか実在しないのだが、ときに私たちの「頭」は、言語表現を格別に扱ってしまって、その誤謬に気づかない場合があるという事実にあろうか。

7-2 「川岸論理」の時間認識

「……さて、みなさん、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感のうち、日常的に、あなたがもっとも頼りにしている順に番号をつけてみてください……」

一般的にみれば、特に現代人は、「視覚」を一番の頼りにしていて、「触覚」を意識的にも無意識的にも最も蔑ろにしている。その経緯は、先にみてきたように、知性原理「140億個の脳細胞」の選択における「しんどいから」「おもしろいから」を想起させる触覚発動実践は「やめとこか」と足踏みしてしまう構図に代表されている。それでは、「視覚」はどうか。湯浅泰雄思想に訊いておきた

い。

今、川の岸に立って水の流れを見ているとする。ある出来事が起こる時刻を知るために、流れの上（流）に目印になる（笹）舟を浮かべてみよう。舟は時間とともに川上から流れてきてそれを眺めている「私」の目の前に来る。その「瞬間」が現在である。ここでは上流は時間の流れにおける「過去」を示している。舟が動くという出来事はやがて私の前を通過して下流に行ってしまうだろう。「下流」は「現在」の私にとっての「未来」を意味する。近代科学の時間認識はこのようなものである。ここでは、観察者ないし観察者である「私」は、川岸、つまり時空における出来事の外部にいて、その（他人事である）時間的推移を認識しようとしている。（湯浅・2001・括弧内補注引用者）

この構図をボクは「川岸倫理」（能動様態の視覚優先原理）と命名している。そして、パフォーマンスが続く。話し言葉でのこの川岸論理の説明を、さきほどの川中論理の構図絵に倣って、聞き手が各自のノートに線画で展開的に描いてみることを要求する。ボクも描く。黒板には川中論理と川岸論理の構図絵が並ぶ。いずれも向かって右側が上流で、左側が下流である。

「……どうして、二つの絵では、時間推移だけが逆転してしまうのか？ ……」とボクはあたかも大発見したかのように大仰に問う。川中論理の絵には、上流が「未来」、下流が「過去」と黄色い大きな字で書かれている。川岸論理の絵には、上流が「過去」、下流が「未来」と黄色い大きな字で書かれている。確かに逆転している。ここまで伝われば、聞き手も、「自分事」としてノートにも描いてみたことだし、「なるほど」「ウムっ」と頷きだす。ここに、「60兆個の全細胞」を稼動（ポルターレと同義）させる受動様態の

「触覚だのみ」（川中論理）と「140億個の脳細胞」のみに依存する能動様態の「視覚だのみ」（川岸論理）との決定的な相違がある。この「相違」が不都合なままに生活現場で働くとき、いったい、なにが起こるのか。子どもと大人を問わず現代人の最大課題がここにある。

7-3 「体験学習」とは

近年もろもろの理由を背景にして自分で「見る・聴く・触る」という自分事の体験学習が注目されている。しかし問題は「自分で」に相当する分母の在り方にある。ボクは、このくだりを説明するときにも、このごろでは構図的な「パフォーマンスだのみ」になる。

「……分子は一緒に『見る・聴く・触る』という体験である。では、『自分で』に相当する『分母』の変容を二つに絞って考えてみてください……」

と要求してから、ボクはすぐさま黒板に二つの「分母」を書く。つまり二つの「分数」が並ぶ。そして同意を求めることにしている。

「……『生身のからだ』と『頭脳』を分母とする。これでいいですか？ 分子は一緒に。では、二つの分数はどのような関係にありますか？ さて、あなたの出番です……」

ボクはしばらく黙っている。もちろん事前に「川中論理」と「川岸論理」の舞台装置は知らせてある。ピンと閃く学生もいる。しかし、なかには、少なからず不平も聞こえてくる。この「不平」にボクはまたもや戸惑う。不平は「説明が抽象的で難しい」と決まって言うのである。ボクは具体的に「からだ言葉」で語っている。だが通じない若者がいる。この「通じない」はときに「三十歳代」までも及ぶ。ボクはただただ「ウム」「ウムッ」なのだ。放置できないのでお節介が続く。

「……二つの分数を結ぶのは『等式記号』か『不等式記号』のどちらなのか？ ボ

クは『不等式記号』であることを生活実感として体得してほしいと願っています……」

と告げてまたもや若者の嫌がる事例を引き出す。嫌がるのは実感できないからなのである。

「……『情は人の為ならず』という諺がある。どういう意味ですか？ ……」

現代人の多くがこの「ことわざ」を実感として解さないといわれている。「情をかけることは人のためにならない」と読み取ってしまう若者がとみに増えている。なるほど、作家の丸谷才一（2004）までもが「日本語があぶない」と憤慨するほどなのだ。

……諺、伝統的な言い回し、名文句などの教養が薄れた。これは重大なことで、いま日本語問題としていちばん意識されているのはこれじゃないかしら。ほら「情は人の為ならず」を近頃の若者は誤解して使うとか言って慨嘆するじゃありませんか……。

慨嘆する丸谷才一は、ついでに、八つ当たり的に「いまやるべきことは、ゆとり教育を即刻やめて、日本語の時間を増やすことです」と提案する。ボクは「慨嘆」することにおいて丸谷才一に大いに賛同している。しかしながら、提案には、全面的に反対である。

なぜなのか。先にみてきたように、「ことわざ」もまた「からだ言葉」なのであるし、実にからだ言葉こそは川中論理の「自己を語る身体表現」というわけなのだ。だからこそ、お互いに共有する経験基盤の存在しないとき、からだ言葉は通じない。事例は先にみてきた「からだ言葉＝顎を出す」における議論のとおりである。ほとんどの若者は「情は人の為ならず」の意味を、字義だけで捉えようとするために、分母に「頭脳」を設置して読んでしまう。そこで、字面だけを視覚のみや聴覚のみで寸詰まりに捉えて、むしろ意味を反転させて読み取ってしまうことになる。さて、この経緯はなにを教えてくれているのか。

「……パラダイム（立場＝分母）が異なると、ものの見方、見え方が変わる……」見方が違うのであるから、時空間の捉え方も、逆転してしまう。逆転があれば、見方の異なる立場それぞれで、「からだ言葉」と「文字言葉」の間に意味の乖離が顕現することになる。目下の課題はここになければならない。ボクはこの乖離を現代文明の摩擦であると受けとめている。この乖離を埋める必要が有るのか無いのか。ボクの身体運動論から展望するならば、「有る」である。一言触れておきたい。この根源的な問題は、先に引いた丸谷流の「ゆとり教育を即刻やめてその時間を解決策に割り当てよ」という手立てにおいて、埒の明かないことなのである。理由を、二つの命題を借りて、端的に提示してみたい。

7-4 「宿命」としての二つの命題

命題とは両義的な「ポルターレ思想」と「デイス思想」との葛藤の問題である。

◇**命題 1**＝人間は未来永劫二足歩行から訣別しない。⇒ 不易・不変の法則。自然的存在者としての宿命。直観原理主導の生活。共生原理主導。身体的受動様態併存問題。川中論理。「存在」の領域。特定の回答の無い世界の問題。自分事の問題。

◇**命題 2**＝人間の拵える技術文明は進化しつづける。⇒ 流行・変化の法則。文化的存在者としての宿命。知性原理主導の生活。競争原理主導。機械的能動様態先行問題。川岸論理。「科学」の領域。特定の回答が有る世界の問題。他人事の問題。

人間は、二足ロコモーション生活者としての道を歩みだしたときから、この二つの命題の両義性を背負う宿命のもとに生きてきたし、そしてこれからも生きてゆかなければならない。ところが、である。近代ヨーロッパ科学主義の立場（川岸論理）は実にこの二つの命

題を切り離すことを基盤としている。デカルト（1596－1650）を参考にしてみよう。

私というものは一つの実体であって、この実体の本質または本性とは、考えるということである。そうして、かかる実体の存在するためには、何らかの場処をも必要とせぬし何らの物質的なものにも依頼せぬものであることを、したがってこの「私」なるもの、すなわち私をして私であらしめるところの精神は身体と全く別箇のものであり、なおそのものは身体よりもはるかに容易に認識されるものであり、またたとえ身体がまるで無いにしても、このものはそれがほんらい有るものであることをやめないであろうことを、私は知ったのである。（落合太郎訳『方法序説』・1976年版）

デカルト（1637）はかくのごとく確信した。考えるためには、まずもって、その主体者が存在していなければならない。そこで、この決定的先行必須条件を頭脳で意識するにしても、その辻褄を合わせるためにも仕掛けが必要であって、超原理的な川岸論理の定義「私は考える、それ故に私は有る」という合理主義を「頭脳」のみで捏造してしまったのである。ボクの身体運動論理で読み解けばそうになってしまう。あなたはごどう思いますか。

「……このデカルト発想に前出の二つの『命題』を重ね合わせてみてほしい……」

なにが、透けて、見えてくるのか。頭脳で知性原理のもとに考え出すことには特定の回答がある。数量化すれば比較検討もできる。ことさらに便利である。だから、このディスプレイ願望のもとにおける「デカルト発想」は、生活規範としても合理主義として根つきやすい。こうして川岸論理の生活化が始まる。このさい便利とは「ポルターレ＝拘束＝portare」からの「離脱＝dis」である。そして便利とは「川中論理＝ポルターレ」からの離脱でもある。この便利志向は、伝播される

ことになるならば、一気呵成に人心を席卷してしまう。ボクの身体運動論理はそうだと見抜いている。

そこで現代日本では、その川岸論理の合理主義万能時代の帰結として、子どもの「生きる力」が問題化してきている。あるまじきことなのだが、「頭脳＝140億個の脳細胞」が、「生身のからだ＝60兆個の全細胞」から抜き出されてしまってひとり歩きしている。帰結が「からだ言葉＝顎を出す・情は人の為ならず」を実感できない現代人を出現させしめている。この問題をどう読み解けばよいのだろうか。

ボクは「大変」だと直覚している。なにしろ、ボクの身体運動論は、命題1に依拠しながら、命題2との融和を企図するために、「生き方の問題」を追求する立場にある。人類は、いうまでもなく、先にみてきたとおり二足ロコモーション生活者に転じてから、知性原理を基盤とする文化的存在者としての宿命（ポルターレ＝拘束）を背負ってきている。だがこの「背負う」の在り方が問題なのだ。その「背負う」を生身のからだに任せるとき、即座に川中論理＝身体運動論理が働いて、その過程では400万年間を通じて培ってきた「生きる力」という蓄積情報がそのまま感応してくれる。実にこの背負うという受動様態（ポルターレ）から逃避（ディス）することこそが川岸論理としてのデカルト発想に相違ない。だがしかし、生きている身体は、川中論理の宿命から逃れることができないのである。

7-5 「零度」に自己を置き直す

逃れることができないのであれば、あらためて、身の置き所を再考しなければならない。

「……デカルトは、自白にも明らかなように、『精神と身体は全く別箇のもの』であると認識した。そして『身体がまるで無いとしても』という仮説のもとに、川岸論理の『考えること』を人間存在の

基盤であると主張した。あなたは同意しますか？ ……」

生きているまるとの人間の「身体」と「精神」はもちろんのことに分離できない。ところが、である。現代日本では、デカルト発想どおりに、「身体がまるで無いにしても」、「考える」ことですべてを解決してしまうという乱暴な假定問題が現実と化しつつある。昨今の日本社会では、身体が介在していなくても、文化的装置としての機械が、すべてを代行してくれる。このさい、「代行」とは、人間の根本的な生存基盤であるはずの「働く」「考える」「感じる」ための機能をいう。この間の経緯に先にみてきた「モノ化する身体」「離陸する精神」の問題の本質が介在しているのである。この過剰なまでにあるまじき「機械代行ディスポルターレ現象」からの脱却は、はたして、可能なのであろうか。

「……可能である。だが前提条件が必要だ。自己を『零度』に置くことである……」と、ボクは脱却の可能性を説くことにしている。零度とは、「自分の本来のあり方」に、自己の生身のからだを「置き直す」ことであった。零度という立場は川中論理の原日本人が経験してきた立ち働き性の生き方そのものである。そしてこの座標軸こそは日本の風土が育ててきた坐禅の求めるところの「自分自身の存在を置き直す」場でもあるのだ。

ちょうど赤道直下に無風帯があるのですが、そこへ入ってしまえば、風を待つしかない。することは夜空の星を眺めて楽しむことぐらいです。満天の星が水平線まで輝いている。目線をおとせば鏡のような海面に夜光虫のように星空がキラキラ反射しています。広大な半球すべてが輝く。大いなる宇宙空間に僕ひとりが在る。天体に浮かぶ地球の「いま・ここ」に生かされている自分を実感できる瞬間です。（高橋・2006）

これは、海洋冒険家の白石康次郎が、ヨッ

トでの単独世界一周の途中での経験を吐露してくれた迫真の「零度」の立場である。風が無いとヨットはお手上げになる。進む（生きていく）ためには待つしかない。無風帯では完全な受動様態である。その完全な「零度」が、白石康次郎をして、「自分自身の存在を置き直す」川中論理の只中で、「いま・ここ」に生かされて在るという本質的に受動様態である「生」の自己発見を体得させたのである。ちなみに白石康次郎は坐禅で「頭」を空っぽにする修行も積んでいる。航海中の緊急事態への対応に即して「頭」に過剰依存しないための訓練だという。自己の存在を置き直すために「ヨシアシの判断」を直観に任せてハラで決めるためなのだそうです。

それでは、なぜに、置き直すのであろうか。命題1と命題2の融合の無いところに人間は本来的に生きていけないからである。いま日本では、「命題2 過剰依存」の生活状況が先行している。もろもろの問題の根源がここにある。坐禅は日常生活を超越した世界かもしれない。しかしながら、その精髓である「零度に自己を置き直す」という思想は、実生活に援用できないはずがない。白石康次郎の「教え」もそうである。零度の立場とは命題1の「二足歩行」の直立姿勢をさらに遡ってみることである。このさい、「立つ」も「歩く」もすでにあまりにも知性原理の渦中にあるすぎる。その零度に自己を置いてみると、400万年間のDNA（生きる力、経験として大脳地図に蓄積されている）「からだ（自己）の内包情報」が覚醒し語りだすのだと、ボクは誰彼なしに伝えることにしている。

ところで、である。ボクの身体運動論では、絶対受動様態の「ポルターレ」をあらためて経験してみることが自己存在を零度に置き直してみることだと考えている。一口に言ってしまうと、ボクは、この経緯をして反省的に出直す可能性を覚知させてくれる通路であると捉えて、その「パラダイム」を、新たなる

生き方の創出に不可欠な「ネオポルターレ＝neoportare思想」であると命名したのであった。だから、ボクは、ネオポルターレ思想に息衝く「自己を語る身体表現」に裏打ちされる生き方を推奨したい。

8. ネオポルターレ思想の時代

そもそもネオポルターレ思想の生き方とは、補足するならば、自己を語る身体表現を導出するために、まるごとの「からだの復権」を再創出するライフスタイルの問題なのである。そして、ネオポルターレ思想とは、これも断言してしまえば、21世紀社会の標榜すべき共生原理の生活を創出するために、「語らない身体からの訣別」を生存戦略として企図する川中論理もしくは身体運動論理の新しい生き方への転換指針にほかならない。

「……400万年間を人類は肉体労働（まるごとのからだの『ポルターレ』）を駆使して生きてきた。つい近年まですべての二足ロコモーション生活者はこの受動様態の宿命を背負ってきた。私はその進化過程を『マンパワーの時代』だと命名している……」

ところで、人間が知性原理の「機械」に頼りだしたのは、たかだか250年ほど前のいわゆる世界史の通説にいう「産業革命」（本稿では「機械代行産業革命」と定義している）以降のことにすぎない。

「……私はこの機械代行たのみの時代を『ハードウェアの時代』と命名する……」

そして、20世紀末ともなれば、コンピュータが凄まじい勢いで登場してくる。

「……このコンピュータだのみの時代を『ソフトウェアの時代』と命名する……」

こうした流行だのみ現象は、先にみてきた「命題2」路線をひたすらに信奉して突っ走る近代科学主義依存の競争原理の社会にあっては、当然の帰結であった。さらに事の顛末についても、先に世紀末点描として、「モノ

化する身体」「離陸する精神」という人間疎外状況を要約して明示しておいた。そしてここでは、この二つの人間疎外状況の顕現を、人間の「動く」「考える」という生活世界へ働きかける基本的な生存戦略機能の放棄であると整理しておいて、人間失格の端緒になるのではないかと見定めておきたい。すなわち、生身での能動様態の生産管理能力を発揮するためのアウトプット装置を、機械代行に委ねだしたということなのである。二足ロコモーション生活者と生活世界「ひと・もの・こと」との「かかわり」という「生の循環」の問題はいったいどうなるのか。この「だのみ」は「便利だから」と片付けてはいけない大変事であるのだ。ひとまず整理しておきたい。

8-1 「フィールウェア」の時代

さらに、21世紀には、まったく次元の異なる産業構造が登場しようとしている。

21世紀は、有限な物質的資源にではなく、無限の心的資源に目を向ける時代となるべきである。これを実現するために、ハードウェア、ソフトウェアにつぐフィールウェアという新しい概念を提唱する。

（佐古・2003）

ボクは、「モノ化する身体」「離陸する精神」の進行状況に併せて、じわりと疎外されつつあった「閉塞する感性」の進行状況の問題をも危惧していたので、この「提唱」のいかほどかに強い関心を抱いていた。そこで、上記の提唱となった講演「フィールウェアへの挑戦ー感性の時代を迎えてー」に聴き入ることになる。演題も魅力的であったし、しかも提唱者は、最先端国際企業の開発部門を担っている第一線の技術者である。

論理的にできる事象と、理由もなく心に感じてしまう事象は明らかに異なる。客観と主観の違いであり、記述できるモノと記述が困難な心との違いである。21世紀はこの心（の問題）にフォーカスしな

ければ立ちゆかない。自己を見つめ、他者を見つめ、大自然を見つめる。その生々流転たるダイナミズムにこそ、人の生命（いのち）の根源を感じる。（前掲論考）と聞こえてくれば、思わずボクは「ウム、ウム」と膝を打ちながら身を乗り出していた。これまでのハードウェアもソフトウェアも機械的な川岸論理の産物である。しかもこの「機械文明の産物」をベースとするこれまでの産業構造のままでは、地球が資源の枯渇状況に直面してきていることでもあるし、ボクの身体運動論からすれば、現代人の過剰依存をとおして捏造させられてしまったもろもろの「人間疎外問題」も飽和状況に達しつつある。だから資源的に無限であるはずの「感性」と「心」に着目せよとの提唱には説得力がある。ボクも、まったく、そのとおりだと同調する。

（科学的に）説明できることから、（一定の回答のない）「感じる」ことを基本とした感性の時代へ、その大いなる幕開けをしようではないか。人が何を感じ何に感動するのか。人をつき動かすものはいったい何なのか。人の感性や感動の源泉に迫り、人と人、人とモノが呼応しあえる世界を作るべきであろうと考えている。（前掲論考）

のだと主張が述べられる。本稿の問う「ネオポルターレ思想」と呼応している。だから、ボクも、膝を打ちつづける。しかし、である。

このアプリケーション（商品化）の目指すイメージは、心拍・呼吸・脈・体温・発汗・脳波・皮膚抵抗など、病気になったり、健康診断（時）でもなければ、人が普段気にすることもない、生体情報をセンシングし、その情報を商品に反映しようというものである。（前掲論考）

ボクは、このくだりにきて、ちょっと待てよと膝を打つ手をやめてしまっていた。

さまざまな商品が、使用者個人に最適な

チューンアップされたものである。しかも使用者の体調や気分に合わせて商品（化）を実現することができる。人と商品が切っても切れない関係、交換不可能な関係にまで高められる時、人はそれをフィールウェア商品と呼び、大量生産・大量消費時代になかった新しい価値観に気づくことになる。（前掲論考）

と、講演は最先端の研究を続けていると告げて結ばれた。なるほど便利この上ないかもしれない。しかし、である。ボクは戸惑ってしまった。不安がつのったのである。

これでは、「閉塞する感性」状況が、急ピッチで進行してしまう。そして、現代人は、あの「洞窟の住人」の垂流になってしまわないか。洞窟の住人とは、古代ギリシア時代のかのプラトン（前427－347）が、重力と闘う「ポルターレ人間」をして、鎖（重力）に繋がれた「非の存在」と見下して人間扱いしなかった重労働従事者（奴隷）のことである。偏見と誤謬だ。ボクの身体運動論では、そうだと、見定めている。この誤謬は、先にみてきたように、デカルト合理主義に触発されて、現在に至ってますます勢力を得てきている。

さて、この誤謬を棚上げしたままで蔓延してしまっている近代科学主義依存状況は、20世紀末までに顕現した「モノ化する身体」「離陸する精神」状況に加えて、21世紀に突入したばかりのいま、新たに「閉塞する感性」状況を捏造させつつある。日本の今日の現実である。「垂流」とはこの「現実」の相をいう。このまま放置するならば、フィールウェアという機械に繋がれて生活する、本物の「非の存在」という幽霊人間になってしまう。たしかに資源の枯渇問題は深刻である。だからこそ、20世紀思想に押し流されて野放図に展開してきた典型的な「物質文明」をこのまま進めていくわけにいかない。だとすれば、企業は生き残り戦略として、「フィールウェア」という新しい地平を開拓するだろう。こ

れこそが現代人の宿命でもある文化的存在者としての命題2「人間の抱える技術文明は発展しつづける」ことの「ことわり」なのである。もしも迂闊にやりすごすならば、この必然的な図式から、逃避（dis）することも許されないことになってしまうかもしれない。

8-2 「人間」はなにをすればいいのか

だがしかし、人間はやはり、命題1「人間は未来永劫二足歩行から訣別しない」の規定する、自然的存在者なのだ。この不易の論理からの「逃避」も許されることでない。では、どうすべきなのか。だからこそボクは、そのために、二足ロコモーション生活者の身体運動論理を根底に据える「ネオポルターレ思想」を世に問おうとしている。

400万年間 ⇒ マンパワーの時代

産業革命後 ⇒ ハードウェアの時代

20世紀末 ⇒ ソフトウェアの時代

と黒板に大書しておいて、大学生を相手にするときならば、その経緯を前記のように説明しながら、「ネオポルターレ思想」の萌芽になりそうな人間と生活世界との「生の循環」と「かかわり」の問題について、ここのしばらく喋りつづけている。ところが、である。2003年12月13日に「フィールウェア」発想の最新情報を仕入れてからののち、ボクの仕掛けは、変わってしまった。新しい仕掛けを、旧式の隣に、次のように大書する。

400万年間 ⇒ マンパワーの時代

産業革命後 ⇒ ハードウェアの時代

20世紀末 ⇒ ソフトウェアの時代

21世紀 ⇒ フィールウェアの時代

旧式に「二本の野線」と「一行の追加」をあしらったものである。そして講釈が始まる。

「……ところで400万年間と産業革命後との間を、20世紀末と21世紀との間を、太目の『野線』で分割してみた。赤い線

である。みなさんは、この『赤色太線』のそれぞれを、どのように読み取りますか？ ……」

とボクは訊く。それから黒板に絵を描く。またもやパフォーマンスが始まる。真ん中に人間に見立てた大きな絵を描く。「立」の字に似ている。人間は五感に拠って環境情報を一身に受けとめている。大きな「立ち姿」の内面に進入するように五感を示す「五本」の太い矢印線を描き込む。そして、である。

「……視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感¹はあなたが生きていくために必要な環境情報を受けとめる根幹である。もう一度、あなたが依存している順番をつけてみてください。そのさい、あなたは、『頭脳』と『身体』のいずれを頼りにしますか？ ……」

と発問する。前段は繰り返しである。だがしかし、この発問の狙いは、後段にある。能動様態で働く知性原理の「頭脳」は環境情報を川岸論理で合理的に選別（集積）してしまう。絶対受動様態の「身体」は川中論理の直観原理に本来的に頼らざるをえない。この立場の相違に「発問の狙い」は設置されているのである。

「……このさい『直観原理』と『川中論理』とはいったい何だと思えますか？ ……」

パフォーマンスも繰り返しになる。でもこの「反復」はボクの「ネオポルターレ思想」を導き出すための必然であるから、その都度に、納得してほしいと巧みに断っておく。

「……いま、あなたの受容（インプット）した環境情報が、あなただけの備蓄経験情報（からだの歴史）とぶつかって、核融合するかのように変化自在に培養されて、あなただけの行動設計図式として生まれ変わりました。瞬間の早業です。そして、出番を待っています。さて、あなたならば、どうしますか？ ……」

と課題を投げかけてみせる。そして、である。では、アウトプット装置は何なのかと訊く。

「……それは、ただひとつ、『動く』ことです。実に『動く』は身体運動のことなのです。自覚していますか？ 立つ、書く、聴く、視る、食べる、喋る、触る、生きる。みな動くことです。聴くためには聞き耳を立てます。坐ることでさえ身体運動を抜きにして不可能です。そして「表現」することもそうです。あなたは、なにを、どのように表現していますか。表現とは、動くとは、あなたの内なる全存在の爆発なのです。それはあなたのあの『培養された内面世界』の『表出』なのです。それは、からだの原点の爆発です。それは生の原点の爆発です。あなたは、爆発していますか？ ……」

大根役者の再演では衆目を集めがたい。だから、ここでも、仕掛けに戻ることになる。

「……この『二本の罅線』と『一行の追加』は、なにを意味していますか？……」

このところのボクの発問はこの問題を強調することになっている。1本目の赤い太線はアウトプット装置の機械代行生活への移行を象徴している。象徴の固定化が「埋没する表現」状況を拵えてしまった。二本目の赤い太線はインプット装置の機械代行生活への移行を象徴している。象徴の固定化が「閉塞する感性」状況を拵えてしまう。嵩じれば、人間と、生活世界との、すべての「かかわり」の遮断である。能動様態と受動様態の放棄であるから零度の座標軸もなくなってしまう。そうまとめて、あとは、静かに問いかける。

「……アウトプットもインプットも機械に代行させてしまえば、人間は、何を『受容』すればいいのでしょうか？ 何を『表出』すればいいのですか？……」

この素朴な「問い」がボクの「ネオポルターレ思想」の発芽の発端になっている。さて、「ポルターレ＝身体運動」のいかほどかはも

う語りつくした。では、ボクの期待する「ネオ」とはなになのか。日本語では「neo」を「新しい」とも「復活の」とも訳している。このさい、「ネオポルターレ思想」の「ネオ」はその両方を同時に意味するのである。

【新しい】⇒ 二本の赤い警告線の象徴する文化的装置の弊害を払拭する手立ての確立。新しい生活思想への転換。西洋思想と東洋思想の融合革命の推進。

【復活の】⇒ 大脳地図のDNA的備蓄経験情報の最大活用を戦略的に企図する。

さて、新時代を構築するために、「革命」と「戦略」の一端を提示しておきたい。

9. 第三次「二足ロコモーション革命」:結語に代えて

ボクは、いま、未明に本稿を書いている。左の頬になにかを感じた。虫だと感触でわかる。ボクの左手がやさしくおさえる。天道虫だった。手のひらにまるまっている。ころがしても動かない。この「動かない」は自己を護る本能の安全管理発動である。窓を開けてボクはその「動かない」を空中にポイとやさしく放してやった。薄明のなかに飛んで消えていった。この「動く」は生還への生産管理発動である。空中での落下しそうな塊から飛翔への切り替えが見事だった。ボクはこの「切り替え」を本能だからと結論したくない。

「……あッ天道虫が『重力』と遊んで生きている！ 人間ならばどうか？ ……」とボクは閃きを楽しむことになった。思い起こすのは先にみてきた重力の発動する絶対受動様態のあの「自然運動」のことだった。落下はまさにその自然運動の典型である。人間ならば極限的な落下運動は制御できない。だから生きる身体運動の経験のうちに、致命傷を避けるために、重力との遊び方という直観原理の安全管理術を学んで身につけてしまう。

このさい、「術（すべ）」とは、感性と表現法とを一瞬にして直結してしまう生の循環という協奏曲なのである。ボクはこの協奏曲を究極の「生きる力」であると考えている。ここにボクの提唱するネオポルターレ思想のすべてがある。

9-1 「大地」は大教育者である

別言すれば、ネオポルターレ思想とは、まるとの「からだ」における安全管理発動と生産管理発動の弁証法的循環経験が培われる「生きる力」の発現思想なのである。

「……チューリップの球根を野晒しにすればどうなったのか？ 思い出してほしい。ハードウェアとソフトウェアとフィールウェアから「離脱＝dis」さえすれば、400万年間の『ポルターレ＝portare』が練成してくれた『マンパワー＝DNA戦略』が蘇る……」

このさい、「蘇る」が「復活」である。外制止条件としての「籬（たが）」さえはずせば可塑性の原理が働いて「DNA戦略」は解放される。それにしても、「新しい時代」を追求するためには「新しい思想」が必要になる。この新思想は譬えるならば坐禅修行における原姿勢としての「零度」に身を置き換えてみることからしか創出されるものでない。

参禅というのは、かつての禅問答の修業的な形態と言ってもいいと思います。坐禅をして、そして坐禅（零度）から立って参禅する。師家の前に身を呈する。つまり自ら答えとなって点検を受ける。退けられてまた坐禅に還る。坐禅から参禅へ、参禅から坐禅へという往復運動が禅の修業の基本であるわけです。（上田・2002）

この往復運動という禅の精髓は宗教的に特化された閉じられた世界のみ求められているのではない。その経緯を、鈴木大拙（1870－1966）が、「現に生きるがままの生の只中に

生きるという事実を認得することによって一市井人の最も目立たぬありふれた生活の裡に自身を啓示する」（1934）と喝破して教えてくれている。大拙はその根拠を端的に示す。

大地は、人間にとりて大教育者である、大訓練者である。人間は、これによりてみずから完成をどれほど遂げたであろうぞ。（鈴木・1944）

大地は二足ロコモーション生活者の本拠地（零度）であった。感性も表現法も大地に育てられる。そこには「閉塞」も「埋没」もない。只に在るのは「同調」だけである。身体も精神も大地に育てられて一如に働く。そこには「モノ化」も「離陸」もない。只に在るのは「同調」だけである。そこには「生の循環」が漲っている。このさい「大地」はすなわち「師家」である。そうであるならば2006年状況の日本で、いま、なにが求められているのか。ボクが自慢げに謂う。

「……もちろん『ネオポルターレ思想』の構想とその『生活的受容』ですよ！

そして『生の循環』の漲る復活版新生『第三次二足ロコモーション革命』のスタートですよ！ その『ノウハウ』は『大地』と『原日本人』が教えてくれています……」

日本の年齢別人口推移に注目してみたい。いわゆる少子化現象は、1990年から2000年にかけて、「年少人口」（0～14歳）が「老年人口」（65歳以上）を下回ることによって始まった。さらに2020年すぎになれば、その年少人口が、「後期老年人口」（75歳以上）を下回ることになる。2050年に至るならば、年少人口が後期老年人口を大きく下回って、超高齢化社会が出現する。この間に、「生産年齢人口」（15歳～64歳）は、2000年頃の8千7百数十万人をピークにして、2100年には3千8百数十万人に激減すると予測されている。この現代日本が直面している年齢別人口推移問題はいったい何を意味しているのか。経済、政治、労

働、教育、生活、健康、福祉、安全などの問題に直接に影響してさまざまな対応が必要になってくる。

一方で、企業戦略としても、従来の「ハードウェア」（機械＝道具性・身体的能動様態性の代行装置）並びに「ソフトウェア」（コンピュータ＝計画性・頭脳的能動様態性の代行装置）のみの開発に停滞しては将来性がない。そこで、さらに加えてこれまでの物作り産業構造の結果として招来させしめた「大量生産大量消費構造」の限界的反省をも視野に収めながら、先端企業は世界的規模で「第三産業構造」として新領域の開発を目指している。それが先にみてきた「フィールウェア開発産業」である。もしも完璧な「フィールウェア」が登場すればどうなるのか。受動様態性を放棄する根無し人間になってしまう。

このように21世紀社会では、上記の年齢別人口推移問題に余儀なくさせられる産業構造の変化にともなって、人間をとりまく生活環境が激変してしまう。だからこそ、こうした社会的時代的変動期には、新しい生命観、生活観、価値観、世界観、自然観、人間観などが問われることになる。このような問題状況に則して、21世紀社会では、これまでの「競争原理のライフスタイル」から「共生原理のライフスタイル」へのパラダイムシフトが要請されている。

「……だから、これからの人間観を、本来の在り方に置き直してみることが問われる……」

のである。身体運動論を専攻しているボクとしてはそのように展望しなければならない。展望は「零度」と「大地」の問題を照射している。となれば、視点を、二足ロコモーション生活の在り方に設置しなければならない。しかも大地の点検を受ける反省が必要である。

「……さて一万年前に何が起こったのか？　そして現在の反省点は何なのか？　……」

一万年前のすべては必然であった。そして、その必然が、やがて20世紀後半からの現在に至るまでに、「モノ化する身体」「離陸する精神」「閉塞する感性」「埋没する表現」状況を帰結として出現させしめたことも、また必然であった。必然が必然を生む。

「……みなさん！　この『必然』のなかにこそ、点検すべき『反省』があるのです……」

とボクの身体運動論の核心を告げる。「大地」は不変である。そして人間は、自然的存在者であることと文化的存在者であることの両義性を背負っていて、その桎梏（portare）から離脱（dis）できない。必然がここにもある。このことも不変である。

「……この『不変』にどう付き合うのか？　この一点に『未来への出口』がある……」

未来への出口とは、これからの時代状況に見合う人間存在の在り方への、新たな様式転換を意味している。だがこの未来への出口は、かの両義性の桎梏を受け入れて、二足ロコモーション生活者の本性（零度）の在り方に、現代人の「存在」を置き直さなければ見えてこない。ここで現代ヨーロッパ思想における一連の反省を振り返っておきたい。

9-2 「限界」の自覚

デカルトの、「身体」を無視してしまうという、あの合理主義に対する疑念が19世紀後半になって台頭することになる。嚆矢はショーペンハウエル（1788－1860）だとみてよい。

物体に属する実在性は時間には認められないものであり、従って時間は絶対的に観念的なもの、すなわち単なる象徴とそれの装備に所属するものなのである。と看破したショーペンハウエル（1851）が近代科学主義における前出の「川岸論理」に固定化している時間観に異議を唱える。そして「あるがまま」を直視せよと反省を促す。身

体は重力に拘束されて働く。かの「洞窟の住人」は「鎖」（重力）に繋がれているのだけれども、重力と闘って生きているのである。認めなければいけない。原点を問い直す反省であった。この新思想潮流が、おりからの「生の哲学＝life philosophy」運動に勢いを得て、身体の復権を提唱したのである。

人間は「精神（ガイスト）」の直観力によって大地から、この苛酷なる現実から高く飛翔し、それから逃れるようなことを為すべきではない。……たしかに、人間から太古の蜥蜴（とかげ）の尾は消えてしまった。しかしその代わりに人間の「たましい」は彼を大地にしっかりと結びつけておく一本のホメロスの鎖（注：プラトン「洞窟の住人比喩論」批判）につながれているのだ。（ユング・1944・注は引用者）

こうして、ユング（1875－1961）は、生の原点を求めて、往時の日本の時代精神が注目することのなかった、川中論理の原点的「東洋思想」に着目することになる。それでは、なぜに現代ヨーロッパ思想は、一世紀ほど前から反省を始めたのであろうか。

「……思い出してほしい。一万年前の原日本人の逃避不可能であったあの転換を……」

先にボクはその根源的な理由を説明しておいた。大陸からの分断。獲物を追う走り働き性の生活を断念した。限界であった。競争原理「能動様態」の生活の破綻であった。狭隘な土地。獲物がいない。だから、共生原理「受動様態」の生活に転換せざるをえない。重力と協調する立ち働き性の生活設計への大転換である。一万年後の「いま」、現代ヨーロッパ思想は、その「限界」を自覚したのである。

「……あの産業革命のときの人口は『7億』にすぎない。一世紀前には『16億』だった。地球には有り余る資源と征服す

べき『空間』があった。半世紀前には『24億』だった。世界が競争原理を過剰に信奉しても、まだ、ビクともしなかった。だがしかし、21世紀に入ったばかりの、いま、『65億』に膨れ上がっている。もう限界に近い。2020年頃の地球人口は『80億』に達すると予測されている。決定的な限界が目前だ……」

そしてこの「80億」は地球資源の養いうる「顕数」の限界だとも言われている。自然は有限であったのだ。地球は有限であったのだ。人間は本質的に生活世界「ひと・もの・こと」とのかかわりという共生原理のもとに生かされて在る。だとしたら、人間の生をいかに捉えるのかという生命観も自然観も、変容せざるをえない。もはや人間だけの競争原理的独善は許されることでない。世界はこうした状況下にいまある。

「……原日本人は、一万年前に、走り働き性の『限界』を経験している。いまやと近代科学主義はその限界を自覚することになった。機械代行型走り働き性の暴威に気づいたのである。そして、新たな思想潮流の時代への舵取りが始まりつつある。ところで、人間存在の意味する『存在』の原義は何だと思いますか？……」

英語の生活用語に頼ってみたい。ボクは、この「存在」の語源も、からだ言葉だと考えている。英語の動詞「存在する＝exist」は「出（いでる＝ex）」と「立つ＝sist」の合成語であるらしい。「立つ」の本義は先にみてきた。では、立って「出でる」の本義とは、このさい、いったい何なのか。ボクの身体運動論で読み解くならば、「出で立つ」ことの本義とは、二足ロコモーション生活者の「生の原点」「からだの原点」である「ロコモーション」（位置移動）そのものにある。先にボクはこの原点問題の契機を「未来への出口」と言った。「出口」とは、まさにここにいう存在（exist）するための、出立点のことな

のである。ここにきて、この論考も、「零度」ともいうべき振り出しに立ち返ることになった。

「……それでは、なぜに、われわれの始祖は『第一次二足ロコモーション革命』を選択したのであろうか。なぜ、『二足直立姿勢』を獲得したのか？ ……」

この問題を別の視点から捉えておかなければならない。1000万年前の「アフリカ」には豊かな森林が全域をおおっていた。類猿人は安穩として棲まうことができた。500万年前。そのアフリカの北部に乾期がやってきた。やがて東側はサバンナ（草原）と化していった。豊かな森林が無くなったのである。安穩の「限界」であった。樹上生活の「限界」である。400万年前。この限界を打開しなくてはならなくなった。そして、第一次二足ロコモーション革命が起こった。理由は他律的であった。自然の限界だったのである。だが、生きていかなければならない。けれども限界を克服しなければ生きていけない。決断のときである。サバンナ（草原＝危険と獲物の同居地）へ出でる。生き方の問題だった。こうして地上生活者が出現したのである。アウスロトラロピテクス（南のサル）という。

「……つまり『限界』が、400万年前に、第一次二足ロコモーション革命を余儀なさせたのである。思い出してほしい。第二次ロコモーション革命はどうして起こったのか？ 原日本人はいかにして誕生したのか？ 思い出してほしい……」

大学生を前にするときならばボクの講義もここで終わる。あとは一言を残すのみである。

「……いまや現代西洋思想が『限界』を自覚しだしている。それでは、現代日本人はどうなのか？ 日本はこの新たなる『限界』を自覚しているのだろうか？ ……」

9-3 「語らない身体」からの訣別

いまたけなわの学力問題を取りあげて本稿

を閉じたい。2004年2月19日の『朝日新聞』トップ記事「小学校で英語必修本格検討」がここにある。ますます激化する国際競争に備えるためには小学校から英語を学ばなければ落伍してしまう。だから、「総合的な学習の時間」を使って英語教育を始めたらい。この指摘が記事の示す中央教育審議会の検討概要である。それから一年足らずの2005年1月19日、「中山文科相」「総合学習削減の意向」「学力低下4教科重視」という大見出しがトップ記事になった。日教組「教研集会」までもが、2003年度国際比較学習到達度調査の結果を受けて、「どうする学力低下」と危機感をつのらせている。しかし、である。ネオポルターレ思想に同調する根本的な反論もある。

学力低下と騒ぐけど、テストの平均が2～3点下がったことがそんなに驚くことなんかな。学校は社会性を身につけ、生きていくための基本的な人格をはぐくむことを第一にすべきです。……地域や家庭の再構築が必要だけど、制度としていじくれるのは学校だけです。だったら、学校に子どもが群れ遊ぶ世界を作るしかない。……少子化というと、労働力や年金の話になるけど、子どもの成長にどれだけいびつな環境かという方が大きな問題です。（毎日新聞・2004年11月29日）

サル学で著名な河合雅雄がこのように直言している。ここに問う「学力」とは知性原理を根幹としている。ネオポルターレ思想用語に言い換えるならば「走り働き性能力」である。この能力の放棄は、人間であるからして、もちろんできることではない。しかし、過剰依存は困る。昨今の日本の子どもがこの走り働き性論理の能力偏重状況に固着させられてしまっている現実問題を紹介してみたい。

昨年（2000年）は変身系の遊びになると腕を組んで突っ立ったまま混ざろうとしない（五歳児教育の）子が二名現れた。この遊びの定番は「知っている動物にな

ろう」や「好きな乗り物に乗ってどこそこに行こう」などである（直観原理の自己を語る身体表現）。その二人の子は、他の子に比べ、動物や乗り物の名前を数多く知っているのに変身する気になれないのである。……いくら誘っても「ボクニハデキナイ」と言い放つ。表現遊び（行動）の中でも、例えば「バナナと言ったら（バナナを三文字に数えて、その『三』の指示する）三人組になって身体で三角形を作る」（知性原理の合理的な身体表現）などの目標が明確な遊び（答えのある即物的計算行動）は素早くイキイキと行う二人である。（高橋・2004・括弧内補注引用者）

これは、からだ気づき教育の提唱者である高橋和子の特筆する、走り働き性論理の知性原理への典型的な固着状況描写の一つである。つづけて高橋和子が指摘する。

「学びには正解がある」「遊びは自由なものであるが、学校ではやらない」という了解が二人には暗黙のうちにあるのかもしれない。私は小さな大人を見たような感じがした。自他のからだとのコミュニケーションを豊かに展開するためには、学校という「規律・訓練を基盤とした身体運動」を行ってきた世界から、身体表現がもつ自由で遊戯的で没我的な身体文化への転換に鍵があるように思える。

（前掲論考）

ボクも同調する。実に上記に特筆した「世界のトップから滑り落ちた日本の子どもの学力」を問題にしている学力観はこの「ボクニハデキナイ」現象を助長する以外のなものでもない。さて、本稿の問うネオポルターレ思想とは、要するにこの「ボクニハデキナイ」状況からの脱却戦略であって、換言すれば「語らない身体からの訣別」を志向しているのである。身体の語るところ知性原理一辺倒の「ボクニハデキナイ」現象は起こらない。

なぜ、なのか。根本理由を再度指摘しておきたい。人間は、身体機能の一側面「知性原理の表出」をとおして、生活世界へ働きかける。これを能動様態の生きる行為という。零度に在る人間は、身体の宿命である受動様態を逆転させて、生活世界との「かかわり」の在り方を直観的に把握する。そして、生き方を表現する。この人間と生活世界の関係における弁証法的「生の循環」を西田幾多郎は「行為的直観」（1933）だという。この経緯を高橋和子（2004）は「からだ気づき」（1998年に命名）という。そして高橋和子は、その「からだ」を、生活世界「ひと・もの・こと」との関係性において「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」ことを契機とする、弁証法的に変容する自他不二の複合的な場の構造として捉える。さらに高橋「気づき」の構造は西田幾多郎の捉える直観構造と同一である。

「……あなたは『爆発』していますか？ あなたの『感性』とあなたの『表現』は、あなたの『からだ』において、直結していますか？ ……」

先にボクはこの「爆発」という言葉を使った。閉塞する感性を覚醒させる。埋没する表現を覚醒させる。モノ化する身体を覚醒させる。離陸する精神を覚醒させる。覚醒とは、このさい、爆発なのである。爆発は、「行為的直観」もしくは「からだ気づき」の働かないところに具体化しない。

さて、この生活的具体化を促進するためには、地球規模の「限界」を自覚するとき、そして語らない身体からの訣別を選択するとき、第三次二足ロコモーション革命を基盤とするネオポルターレ思想の生活創造へと時代精神を切り換える以外にその方途はありえない。なぜならば「爆発」とは、受動様態と能動様態の弁証法的円環的循環であって、つまりは「身体＝受動様態」と「運動＝能動様態」との連動的「生の循環」であって、二つがバラバラでは生起しないことなのである。だから

こそ、問題にすべき根本は、近代科学主義が合理的に割り切って学問の対象としてきた「身体」と「運動」にあるのではなくて、曖昧であっても、数量化しえなくても、人間存在の総合的なパラダイムとしての生活的な、すなわち一人ひとりの人間の「生き方の問題」の基盤となる「身体運動=human movement=ポルターレ」の在り方でなければならない。

もうひとつを補足しておきたい。ボクの専門は体育である。そのボクは「体育とは、身体運動をとおしての、教育である」という定義にこだわっている。だから専門家として、やはり、先にみてきた根源的な「身体表現の二様態」の問題に関して、体育の視点から、触れておかなければならないことがある。二様態とは「生きる力」の表現形式としての「走り働き性」と「立ち働き性」の問題なのである。

運動生理学的に、「立ち働き性」「定常円環運動性」による労働と、「走り働き性」「不定直線運動性」による労働を解剖しますとそれぞれ次のようになります。あなたがテクテク歩きの散歩を長時間行うとします。確かに、少々の疲労感を覚えますが、息があがってしまってどうしようもないという状態にはいたりませんね。しかも、慣れさえすれば、五、六時間つづけざまに歩いても平気になります。この場合、「赤い筋肉 (red muscle)」を主に使用しているからなのです。あなたが、全速力で、百メートルを走るとします。さあ、どうなるでしょうか。走り終えたときは、息も絶えだえで、しばらくは酸素不足で金魚のように口をパクパクしなければなりません、どうでしょうか。そして、疲労が回復するまでは、次の運動を続行することもできません。この場合、あなたは「白い筋肉 (pale muscle)」を主に使用しているからです。

（伴・1997）

もうおわかりだろう。一万年前に立ち働き性の生業へと決定的な革命を遂げたそれからの生活は、「立ちつづける」という労働形態をとおして、「赤い筋肉」を多様する身体機能を特殊に練成したのである。いうまでもなく走り働き性の生業は基本的に獲物を追跡する走ることに由来している。このさい、走るは、速度が増せばなおさらのことに、「白い筋肉」を多用する身体機能を練成する。実には一万年前、原日本人は、その白い筋肉依存型生活から、赤い筋肉依存型生活へと生き方のパラダイムを転換したのであった。

1929年、D・ブラウンが、この赤い筋肉と白い筋肉の神経支配の原理の発端を解明しました。それは、遅く収縮する赤い筋肉、すなわち緊張筋の方が、速く収縮する白い筋肉、すなわち相動筋よりも、「反射的に」活動しやすいという発見でした。その後、この研究が進み、赤い筋肉は反射神経支配で（働き）、白い筋肉は大脳支配（の働き）であることが検証されたのです。（伴・1997）

白い筋肉の働きは力強く迅速である。そのために臨機応変に速く収縮しなければならない。臨機応変とは何なのか。いつ、どこで、どのように、いかに働けばいいのか、その相動的なモメントを合理的に判断して最適な方法を選択することを意味している。この判断を知性という。ゆえに獲物を追う、狩る、解体する、運び帰るという走り働き性の白い筋肉主導型の労働は大脳支配なのである。一方で、赤い筋肉は力強くないものの長時間持続して働くことができる。そのために遅くゆっくりと疲れないように収縮する。

ところで「疲れ」を意識するのは大脳の働きである。だがしかし、大脳はいたって利己的にしか、しかも合理的にしか働かない。だから大脳は、即座に損得計算をして、有用性の選択のもとに「身体運動=ポルターレ」を

も支配してしまう。すなわち、有用性を認めないとき、大脳は白い筋肉の稼動を制御してしまうのである。そしてこの制御こそが知性の仕業である。けれども、生身の人間は、この有用性論理だけに頼っていたのでは生きていけない。

「……先に『立』と『生』の字義における『生きる力』の問題をみてきた。このさいの『生きる力』とは何であったのか？ 思い出してほしい……」

第一義的に「重力を打破する」ことだったのではないか。実に赤い筋肉とはこの重力に拮抗するための「抗重力筋」なのである。別名で重力に応じて反射的に働く緊張筋ともいう。生きるために、働くために、人間は、重力と一生を付き合わなければならない。だから、元来的に怠け者の大脳支配全面依存であっては、生きていけないのである。したがって身体機能には、もうひとつの「反射神経支配」という身体運動構造が400万年間の生き様をとおして組み込まれたのである。

一万年前、原日本人は、赤い筋肉を多用しなければならない生活革命を選択せざるをえなかった。この経緯も先にみてきた。そして、この経緯に、西洋思想と東洋（原日本）思想の基本的な構造上の相違の根源があることも先に指摘しておいた。筋肉の働き具合という「からだの原点」問題が両者における思想形成にも繋がっているのだが、いま問い直すべきことは、その自覚と反省行動にあるのであって、知識として留めおくことではない。反省すべきこの「からだの原点」とはすなわち零度の身の置き所に相違ないのである。

「……ところで、反射神経支配の赤い筋肉主導の立ち働き性の労働においては、その間、大脳活動を別の目的に使うこともできます。散歩を想定してみてください。歩くことは典型的な反射神経支配の赤い筋肉主導型の身体運動です。だから、歩きながら、あなたはいろいろと想像し

たり仲間と喋ったり、ときに虫の声を楽しんだりすることもできます。一方で白い筋肉主導型の身体運動は大脳に直結しています。つまりあなたの知性は身体運動目的に固着してしまうのです。この二様態の身体運動構造のもとに、自然と人間が二項対立で向き合うという西洋思想と、自然と人間とが自他不二になって同調してしまう日本思想との、決定的で根幹的な相違の鍵があるのです。『わび』とか『さび』とか『義理』とかという日本思想の独特はこうして土着したものだったのです。かつての日本の生活風土は雄弁に独特『自己』を語る身体表現を育ててくれたのでした。反省するならば、語らない身体『ボクニハデキナイ』に縛られた子どもたちを捏造してしまわないためにも、『筋肉の働き問題』を馬鹿にしてはいけません。同意してくれますか？ ……」

本稿は西洋思想の大いなる「恵み」である「科学」を一方的に無視してしまうものではないことを言明しておきたい。しかしながら生活における過剰なそして誤った科学主義依存状況には反省を求めるものである。本稿の問う「ネオポルターレ思想」とは、そのうえにたって、西洋思想と東洋（原日本）思想の融合を企図していることを付言しておきたい。さしずめ、白い筋肉主導型思想と赤い筋肉主導型思想との生活的融合を、走り働き性型思想と立ち働き性型思想との生活的融合を目指していると言い換えてもよい。

ネオポルターレ思想とは、簡単に言ってしまうと、400万年間にわたるDNA情報として個々人にも伝承されている「からだの経験情報」の解放を呼びかける生活指針にすぎない。すなわち、「いま・ここ」の只中に生きる現代人が「自己を語る身体表現」を復活させるための、そして自らが「生活世界＝ひと・もの・こと」との豊潤な「生の循環」を取り

戻すための、まさにそのために、「語らない身体からの訣別」を促しているのにすぎないのである。この「促しているのにすぎない」というボクの表現は、いったい、なんであるのか。本稿はこの一事をもって最たる具体例を提示しているつもりなのである。

【文 献】

- 1) 伴 義孝 1990 あなたの身体は日本人です 晃洋書房
- 2) 伴 義孝 1994 スポーツ思想の誕生—大島鎌吉の周辺— 創文企画
- 3) 伴 義孝 1997 「生きる力」の再発見 晃洋書房
- 4) 伴 義孝 2000 二足ロコモーションの意味論 関西大学出版部
- 5) 伴 義孝 2005 「気づき」の構造—実践と思想の対話— 関西大学出版部
- 6) ベルグソン 1907 創造的進化(上・下) 真方敬道訳 岩波文庫(1975年版)
- 7) デカルト 1637 方法序説 落合太郎訳 岩波文庫(1976年版)
- 8) ユング 1944 心理学と錬金術 池田紘一・鎌田道生訳 人文書院(1972年版)
- 9) 河合雅雄 2004 私の教育改革論 毎日新聞 11月29日
- 10) 木村 毅 1978 日本スポーツ文化史 ベースボール・マガジン社
- 11) 丸谷才一 2004 日本語があぶない 「文藝春秋」5月号
- 12) 西田幾多郎 1911 善の研究 岩波文庫 1975年版
- 13) 西田幾多郎 1933 哲学の根本問題 西田幾多郎全集 岩波書店
- 14) 岡本敏子 1999 芸術は爆発だ!—岡本太郎痛快語録— 小学館文庫
- 15) プラトン プラトン中期の著作 国家 山田潤二訳 明治図書 1963年版
- 16) ペンフィールド 1955 脳の機能と行動 岩本隆茂ほか訳 福村出版(1986年版)
- 17) 佐古曜一郎 2003 フィールウェアへの挑戦 人体科学会第13回大会抄録集
- 18) 鈴木大拙 1934 禅学への道 坂本弘訳 アートデイズ(2003年版)
- 19) 鈴木大拙 1944 日本的霊性 岩波文庫(1976年版)
- 20) ショーペンハウエル 1851 知性について 細谷貞雄訳 岩波文庫(1976年版)
- 21) 高橋和子 2004 からだ—気づき学びの人間学— 晃洋書房
- 22) 高橋和子 2006 大いなる宇宙空間に「僕」がいる 「女子体育」9月号
- 23) 上田閑照 2002 十牛図を歩む—真の自己への道— 大法輪閣
- 24) 梅原 猛 2004 梅原編・縄文人の世界—日本人の原像を求めて— 角川書店
- 25) 和辻哲郎 1935 風土—人間学的考察— 岩波文庫(1995年版)
- 26) 和辻哲郎 1937 倫理学(上・下) 岩波書店
- 27) 湯浅泰雄 2001 人体科学の将来を考える 人体科学会「人体科学」10巻1号